俳　句　雑　誌

水　明

2026　11月号

令和八年十一月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十九巻第十一号



《今月のかな女》

時雨傘ちゞれし紅葉つけしまゝ

『龍膽』所収　昭和二年

長谷川かな女

時雨は、秋の末から冬の初めに、降ったり止んだりまた降り出したりする通り雨のことを意味するが、歳時記には沢山の傍題があり、本句の「時雨傘」もその一つであって、なかなか情緒に富んだ辞である。時雨は、冷気を伴う局地的な天候の変化によるもので、山に囲まれた地域に多いと言う。特に京都に時雨が多く、古い時代から詩歌に詠まれてきた。

さて、この句の時雨は、そのような講釈とは関係なく、かな女宅に来るまでに時雨に遭遇した人の傘に載っている枯れ紅葉が、まるでささやかな土産のようで面白い。主たる季語はもちろん「時雨傘」である。（鬼之介・註）

水　明　第1154号

今月の巻頭句

季音雪　燈台の高く見ゆる日鵙猛る　大村節代

季音月　甲冑の暗き口より秋の声　横山君夫

季音花　夕花野風に消さるるハーモニカ　渋谷きいち

水明集　ベランダにシーツ舞ふ黙日の盛　寺町知子

鼓笛集　白桃を剥く手は時に母を引く　木谷葉子

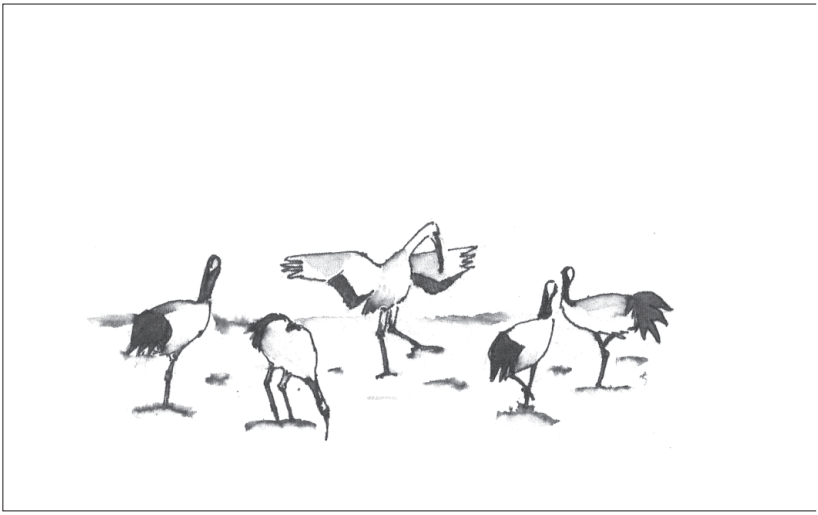
山紫集　木槿咲く隣は町のサイクル店　岡田宣子

水明

令和８年

11 月号

今月のかな女　山本鬼之介　1
今月の巻頭句　4
静　心（作品）　河野はるみ　6
秋の声（近詠）　曲淵徹雄　7
心　静（近詠）　五明　昇　8
百尺竿頭 ※主宰作品の鑑賞　檜皇ことは　10
ゆずり葉 ※季音月評
季音「雪」（同人作品）　大村節代　菊池ひろこ　五明　昇　ほか　12
季音「月」（同人作品）　横山君夫　日高道を　正木萬蝶　ほか　19
季音「花」（同人作品）　渋谷きいち　越田栄子　染谷風子　ほか　24
『水明誌』を繙く　伊藤幹哲　29
現代俳句鑑賞　網野月を　30
新同人紹介　32
句集喝采　菅原卓郎　37



水明集

寺町知子　阿部幸代
石井直子　ほか

作品鑑賞　山本鬼之介　49
水琴窟（水明集九月号鑑賞）　池田雅夫　53
俳誌望見　梅澤輝翠　55
山紫集　56
山紫集作品評　網野月を　60
鼓笛集・作品評　日髙道を　62
りんどう忌の記　青木鶴城　66
かな女句碑清掃の記　青木鶴城　68
水明例会報・各地句会報　69
風声　76
水明発展基金御礼　77
後記　38

題字：長谷川かな女　表紙：内田恵子　カット：福田千春

静心

山本鬼之介

老いたるも気分は跳人里まつり

爽籟がこよなき馳走奥の院

枯淡かな一輪挿しの糸薄

鰯雲若狭の空も紀の空も

尼五山を巡るひと日よ露の径

行く秋や名刺代りに千社札

世話物の帰路の余韻よ十三夜

体拭く日本手拭文化の日

秋の声

河野はるみ

音頭取る最高齢や菊膾

栗爆ぜぬ子供の燥ぐ里の庭

水車せはしく廻る水の秋

長崎空港カリヨン響く秋高し

ぽつぽつり天窓叩く秋の雨

嵐去りよーいどんとや虫時雨

島島に汽笛が届く霧の夜

私が住んでる草加は、日光街道・松並木・綾瀬川と自然豊かで、俳人には、そはそはする様な魅力あふれる町です。

職場には毎年燕が巣を作り、月が正面から昇り、駅までの道すがら、屋敷林を覗き、道端には草花、鳥、虫などなど事欠かない処ですが、水明に入って二十年経とうかとしてる今やっと、楽しく俳句を詠む事が出来るように成りました。目にする物耳に届く物が、いとおしく感じられて、どう詠みどう語れるか、四苦八苦。これも又、楽しです。

心静

曲淵徹雄

静静と合はする呼吸初稽古

のどかなり山頂までも届く法螺

苔茂る駆込み寺の鐘撞堂

夏祓布を引き裂く巫女の指

秋高しおほどかに鳴く腹の虫

使はれぬ火の見の鐘をつむじ風

冬怒濤島の岩屋の乏しき灯

俳句と同じ頃に始めた太極拳の稽古も、いつの間にか二十年余りになる。太極拳教室の初稽古は、「新年好」の挨拶で始まり、老師の先導で無言のうちに呼吸を合わせて柔らかに拳を打つ。俳句も太極拳も力まずに肩の力が抜けていると気持ちよくできるような気がする。

句材を求めて一人吟行のつもりで鎌倉辺りへ時折訪れる。東慶寺、建長寺、天園ハイキングコース、瑞泉寺から江の島などを巡る。江の島の稚児ケ淵、岩屋へ向かう崖道には芭蕉の「疑ふな潮の花も浦の春」の句碑がある。海が静かな時は稚児ケ淵の岩場まで下りて寄せる潮に手を浸すこともできる。

この頃は聴力の衰えを感じるが、聴き取れない声や音を心で自由に創る楽しみもあるように思う。

百尺竿頭

◎主宰作品の鑑賞

五明　昇

八月号

鈴蘭を咲かせ洋館静もりぬ

可憐に咲くスズランを前景に静かに佇む洋館と言えば、神戸市北区鈴蘭台エリアに残るレトロな建築群が想起される。戦前に建てられた建物は高めの天井、シャンデリア、木製サッシなど、当時の和洋折衷の趣を持ち、関西の軽井沢とも呼ばれている。洋館の静かな空間とスズランの凛としたモチーフが重なるノスタルジックな世界観が見事だ。

若竹そよぐ神前婚の控室

神前婚（神前式）は、神社や式場の神殿で神様の前で結婚を誓う、日本の伝統的な挙式スタイルである。神前式の控室は、挙式前の新郎新婦の支度部屋や、両家親族が集合して顔合わせや親族紹介を行うための大切な場所。掲句はこの控室の厳かな緊張感と、庭前にそよぐみずみずしい若竹とを取り合わせ、挙式前の参列者の心情を巧みに詠み上げている。

人生は予習復習雲の峰

「雲の峰」は陶淵明の漢詩「夏雲多奇峰（夏雲奇峰に多し）」に由来するとされるが、誠に空へ向かって激しく成長する姿は、まるで険しい山の峰のように見える。司馬遼太郎の『坂の上の雲』ではないが、人生は雲の峰を目指す試行錯誤の旅の連続なのかも知れない。そのためにも、古来の教えである予習・復習の意味を改めて肝に銘じる必要がありそうだ。

向日葵に迎へられたる字の道

住所の「字（あざ）」は、明治時代の大規模な市町村合併の際、新しい自治体の中に江戸時代の村を大字（おおあざ）、大字の中の小さな集落や田畑を「字（あざ）・小字（こあざ）」として残した結果である。

その後字名が整理された地域も多く、由緒ある地名が消えてゆくのは淋しい限り。今、向日葵に迎えられて作者が踏み入る字の道の長からんことを祈る。

理科室に滾るフラスコ大西日

フラスコは、化学や理科の実験で使われる、首の部分が細くて口が小さなガラス製の容器で、液体を混ぜる、加熱して沸騰させる、一定量の液体を正確にはかるなど、用途に合わせてさまざまな形がある。煮え滾るフラスコと窓から差し込む激しく厳しい大西日で、理科室の中は耐え難い暑さだ。卒業研究の実験にいどむ師弟の白衣も汗にまみれている。

巌かに大名時計夏の暁

江戸時代は、日の出と日没を基準とする不定時法の時刻制度が使われていた。大名時計はこれに対応した機械式時計で、一日を昼と夜に分け、それぞれの期間を六等分して時間を測るため、季節や昼夜の長さの変化に合わせて文字盤の駒や分針の速度を調節する必要があった。専門の時計職人が手作りした一点物の美術工芸品で、今も各地の博物館に鎮座し、巌かに「自鳴（じめい）鐘（しょう）」と呼ばれる時鐘を響かせている。

睡蓮にかな女を真似て屈みけり

平成二十五年刊行の『長谷川かな女全集』の口絵（かな女アルバム）の冒頭には、古希を迎えたかな女が睡蓮を想わせる池の辺に屈む姿が大写しで掲載されている。この写真は昭和三十二年五月、埼玉県小川の紙漉を見学した折のもので、清楚で知的な面差しと、やや大き目な宿下駄との不調和が不思議な魅力を醸す出す珠玉の一枚。咲き初めた睡蓮の池を前に、ふとかな女を真似てみる心情はまさにむべなるかな。

山嶺を法螺渡りゆく大暑かな

奈良県の吉野・大峯山は修験道の根本道場である。この地では毎年、開山期間の中間にあたる大暑の時期に本格的な「夏山登拝・修験」の最盛期を迎える。全国から集まった山伏や信者が厳しい暑さの中、標高一七一九メートルの大峯山山頂を目指して「鐘掛岩」や「西ののぞき」などの険しい行場を登るが、行者の道中、山林に法螺貝の音が鳴り響き、涼を呼び、魔を払うとされている。

団扇太鼓の勤行哮る夏の果

団扇太鼓は、丸い木枠の片面に牛革を張り、持ち手を付けた胴のない和太鼓で、軽く叩くだけで澄んだ響きのよい音が広がる。日蓮宗や法華宗でお題目（南無妙法蓮華経）を唱える際に、リズムを整えるための法具として広く使われ、俗に「法華の太鼓」とも呼ばれる。日蓮宗の夏の重要行事である「盂蘭盆（うらぼん）施餓鬼（せがき）会（え）」でも欠かせない存在で、僧侶の唱える力強い勤行に合わせて盛大な音を轟かせる。

打水やむかしながらの隣組

打水は玄関先や庭、道路などに水をまく日本に伝わる伝統的な習わしで、単なる暑さ対策にとどまらず、住環境を快適に保つ知恵や地域社会の調和、おもてなしの心を込めた大切な作法でもある。京都では、掃除や打水はお隣の敷地へ一尺（約三〇センチ）だけはみ出して行うのが美徳とされ、近隣への気遣いも大切。最近ではエコを意識した二次利用水の活用や地域ぐるみの打水大作戦など話題が尽きない。

ゆずり葉

檜　鼻　こと は

◆季音九月

夕凪や沖の巨船は時を止め　　大場順子

昼間のざわめきをすべて忘れたように風はいつの間にか止み、水平線の彼方には、沈みかけた太陽が空を淡い橙色に染めています。一日の終わりを告げる夕凪の時刻は、日常から急ぐことを忘れさせてくれるようです。そして、沖には巨大な船がまるで動きを失ったかのように浮かんでいます。

「時を止め」という措辞が、その視覚的な印象を巧みに捉えています。夕暮れという一日の境目、凪いだ海、遠くに浮かぶ巨船。それらが一瞬の中に凝縮された一句。

作者自身もその光景の中で時間を忘れて立ち止まり、この美しい瞬間がいつまでも続いてほしいと願われたのではないでしょうか。

白南風やグーの形のクリームパン　　町野広子

「白南風」と「グーの形のクリームパン」という取り合わせが何とも素敵で、ほのぼのとした楽しさが際立つ一句です。

「白南風」は、梅雨が明けた頃、南から吹いてくる明るく爽やかな風です。その爽快で開放的な言葉に対して、次に現れるのが、なんとも愛嬌のある「グーの形のクリームパン」。この意外な取り合わせによって、句全体に明るいユーモアが生まれています。

「クリームパンのふっくらとした丸みや、指を握ったような形を、子どもの仕草にも似た「グー」と捉えたところに作者のセンスがひかり、「丸きクリームパン」などとするよりも、具体的な形が目に浮かんできて、おいしそうなクリームパンを想像してしまいました。

遠くへは行かぬ旅なり夏帽子　　森川義子

一人旅の楽しみは、何と言っても自分の好きなように時間

を使えることにあるのではないでしょうか。朝は目覚まし時計を気にせず、ゆっくり起きてもいいし、予定を決めずに街を歩き、気になる店を見つけたら立ち寄ることもできます。

計画を練っての遠出の旅も捨てがたい楽しみがありますが、自由気ままに思いついた時に、ぷらっと出かける旅もいいものです。「夏帽子」は、その小さな旅の主人公ともいえる小道具。遠くへ行かなくても、夏帽子をかぶれば、いつもの日常から少しだけ離れて、くつろぐことができます。近郊の海辺や町、今いる場所の周辺をゆっくり歩き、身近な風景を楽しむ、そこには年齢を重ねた者ならではの旅の楽しみ方があるように思います。

見慣れた道であっても、旅人の心持ちしだいで歩けば、新しい景色が見えてくる夏帽子です。

フライパンの焦げたる匂ひ八月来る　　池田雅夫

「フライパンの焦げたる匂ひ」という生活感たっぷりの措辞から、「八月来る」という季節の大きな時間へ飛躍するところが何とも面白い一句です。

現代において八月といえば、盛夏の盛り。蝉の声や強い日差し、入道雲など、いかにも夏らしい景物を思い浮かべますが、作者は台所の「匂ひ」によって八月の到来を感じ取っています。

さて、「焦げたる匂ひ」ですから、暑さのためにぼんやりされていたのか、何かに気を取られていらっしゃったのか、うっかり焦がしてしまった、そのような日常の一場面が、「八月来る」という季節の節目と重なっているように思います。格別な出来事ではない、しかし、こうした何気ない生活の一瞬に季節を発見するところに俳句の面白さがあるのかもしれません。

先鋒の抜き胴石火青嵐　　保坂翔太

剣道において「一本が決まったかどうか」を、剣道未経験者が判断するのはとても難しいように思います。何回か剣道の試合の応援に行ったことはあるのですが、私もその一人です。抜き胴という鮮やかな決まり手を知ったのも応援を通じてのことでした。

相手が面に打ち込んできた瞬間、身をわずかに沈めてその刃先をかわす。次の一瞬、相手の胴が空いたところへ、竹刀を鋭く走らせる。竹刀が胴を捉え、打ち切った勢いのまま残心を示し、静かに構え直す。まさに一瞬の見切りと技の冴えが決まった瞬間です。

「青嵐」の季語の斡旋と共に、硬質で緊張感のある一句、道場のその場に居るような臨場感を味あわせていただきました。



秋の鳥　大村節代

色鳥来蔵に秘蔵の鎖鎌
鵙猛る素焼の鉢を叩き割る
燈台の高く見ゆる日鵙猛る
山道に靴あとしるき秋旱
秋出水突き抜けて行くオートバイ

片陰り　菊池ひろこ

祖母いまも遠ざかりゆく片陰り
青き香は戦時の記憶トマト畑
打水す生家の土の香をもとめ
風まとひ秋の句を詠む生家跡
暮れかかる山路より来て茸飯

風の声　五明昇

鵙日和古城の茶屋の酒饅頭
藍染めのシャツの着心地処暑の風
秋風にわが身を透かす竜飛崎
霧ごめに駒の嘶く蕎麦処
小城下を音なく落つる鮎の影

巻き舌　近藤徹平

巻き舌の哮る軍談寄席は秋
尼僧行く行人塚や秋の声
糸瓜切り小町好みの美顔水
街残暑突如線状降水帯
ＳＬの汽笛一声稲の花

降臨の境　延昭

穴まどひ巻尺並べて発条仕掛け
巻き舌は川端育ち葛の花
竹の春背伸びして観る野外劇
稲の花百姓信心深きもの
降臨の逆鉾祀る秋の峰

梨狩　島津初花

稲雀風の行く方を曲りけり
電線を撓めて止まる稲雀
「幸水」の名に相応しく梨熟る
梨園の一隅に立つ主の声
梨狩や掲げて競ふ家族づれ

水澄む　鈴木康世

雉鳩の声聴きとむる処暑の朝
水神の裾輪満して水澄めり
壊れゆく邪気なき笑顔小鳥来る
水澄むや見過ごされゐる屏風岩
ひよんの実を吹きて無聊を宥めをり

萩の秋　十倉和子

初秋の海鳥群れて巌包む
爽やかや俳句相撲の勝名乗り
練塀の傷み労はる萩の風
玉蜀黍にかぶりつくとき縄文人
秋灯の電車寄り来て並走す

若狭の初秋　鳥羽和風

一族の夜具整ふる盆用意
秋すだれ歪のままに吊られをり
葛の花落石注意の里帰り
漁火の並ぶ沖あり夕芒
稲雀縄張の田をひとうねり

玉子焼　永野史代

けふ処暑の厨に匂ふ玉子焼
箸さばき自在に処暑の若狭宿
水羊羹すうつと食める昼さがり
台風の目が逸れてより点眼す
雲の切れ目より台風が来てをりぬ

不揃ひ　町野広子

木の家に木を打ちつけて台風圏
色鳥や棚に賢治の童話集
色鳥の羽根を拾ひし杜の中
不揃ひの梨を求めし旅の帰路
瓜を揉む母の手加減塩加減

九月に　　松井由紀子

ワンピースたらりと下がる夏の果
身の透くるまで吹かれたし秋の風
雨音へちちろ和す夜の眠きこと
久久の挨拶新涼の水辺
転ばずに泣かずに行かな大花野

積もる光陰　　丸山マスミ

秋風や水底に声壇の浦
曼珠沙華降りみ降らずみ鯖街道
廃屋に積もる光陰彼岸花
思惟仏の恩愛杳と紅葉月
大和路の光まとひて稲の花

色鳥来　　茂木和子

不器用な生き方いまも赤梨むく
赤梨や変はらぬ友の手の温み
泣き笑ひしてゐる羅漢鵙の贄
鵙啼けり人もしてゐるアイライン
養生の芝につぎつぎ色鳥来

鵙日和　　森川義子

節ぶしの機嫌よろしき鵙日和
そそり立つ絶壁仰ぐ鵙日和
夕凪や隅田の流れ穏やかに
川なりに曲がる小径や白粉花
逍遥のいつもの野路の白粉花

残暑

森本早苗

残暑光敗戦エースに貰ひ泣き
小首傾ぐる遺影の猫も残暑かな
ラ・フランス好きな子の子は適齢期
初秋や丹波路快速二人旅
無人駅多き丹波路泡立草

秋祭

山中みどり

せやせやと大神輿ゆく秋祭
手古舞の鉄棒の先赤とんぼ
剥き梨の大盛り神輿の担ぎ手へ
祭仲間が遺影を翳す大神輿
祭終宴秋深まりぬ川の町

寺家ふるさと村界隈　網野月を

野小豆の花の黄色の自己主張
ベルカントではないけれど秋の蟬
色づく田同じ背丈に稔りけり
藍淡き山山の並み野分立つ
秋曇どこまで届く鐘の音

京扇

石井喜恵

おしろいや左は伏見右は京
おしろいや女形至芸の旅一座
色鳥や舞ひ納めたる京扇
秋風のついてくるなり化粧坂
逆さ富士湖の静寂や稲の花

秋日和　石山かつ子

理容師に若き跡継ぎ竹の春
扁額の寄進めでたき竹の春
水琴窟は黄泉の音かも竹の春
美術館は最上階よ秋日和
渓風の重くなりたる下り鮎

風　内田恵子

おしやれ着と淡き口紅処暑の風
秋の風透明色の塗り重ね
舌長きトーテムポール秋の風
落鮎や光失ふ銀指輪
点描画の筆の大小色鳥来

虫の声　梅澤佐江

提灯に愛し子の名を地蔵盆
水琴窟の醸す静寂や竹の春
清風の誘ふ茶室竹の春
紫に暮れゆく湖に雁の声
降家の宮を偲ぶ宿りや虫の声

白露　大橋廸代

白露かな歌を忘れし鳩時計
あらたなる皺新涼の手鏡に
のら猫を木に駆りたつるつくつくし
米十砠（キロ）にハンドルぐらり秋の晴
法師蟬塚の埴輪が耳に手を

絵蝋燭　　大場順子

歌心あれば見えくる稲の花
鮎落つる山が力を抜く日かな
絵蝋燭灯し寄り合ふ台風下
鳥兜映ゆる斜面の冷気かな
外つ国の子の元に居る良夜かな

俳句
11月号
予告
10月23日発売
予価1,500円（本体1,364円）⑩

巻頭作品50句 西村和子
作品21句 西山睦・山口昭男

第72回 角川俳句賞 発表！
受賞作 山口遼也「蜘蛛とべり」50句
受賞のことば／推薦作品10句抄
選考座談会 仁平勝×対馬康子×小澤實×岸本尚毅

句集特集 栗林明弘句集『花野中』
特別レポート 第29回俳句甲子園 佐藤知春
特別企画 現代仮名遣い制定80年 旧仮名遣ひの魅力
付録 季寄せを兼ねた俳句手帖 冬・新年
※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」（https://bookwalker.jp/）など電子書店で購入できます。
発行 角川文化振興財団　発売 株式会社KADOKAWA https://www.kadokawa.co.jp/

季音月

秋の声　横山君夫

芙蓉咲く古寺に二体の朱唇仏
嫁ぐ日の門広く開け白芙蓉
形見なる菓子器の堆朱秋澄めり
甲冑の暗き口より秋の声
釣られたる魚籠の鯉より秋の声

夏の疲れ　日高道を

鴨川を渡る夜風や大文字
カンナ燃ゆ熱闘甲子園終はる
ひと夏の疲れも共に秋扇
黙祷の鐘を数ふる残暑かな
一人旅オールドパーと秋扇

落鮎　正木萬蝶

口寄せが呪文を吐けば曼珠沙華
曼珠沙華ひとひ君へと戻る旅
台風の目や川の字に吾子眠る
鮎さびて蒔絵の中に潜る刻
体育館の跳箱暗し虫すだく

平和の色　青木鶴城

星祭出会ひを次の夢となす
新涼や居住まひ眩し訪問着
魂送り書棚に義父の広辞苑
溶接の火花の散華盆の明け
血の色を平和の色に花カンナ

河原の黙　曲淵徹雄

稲びかり関八州を奔り抜け
大文字五条河原の深き黙
飽きるほど赤いカンナを濡らす雨
台風裡抱き合ふままの道祖神
山峡の小店の販ぐ鳥兜

糸瓜　原田秀子

画眉鳥のコロラトゥーラや秋の音
半跏趺坐そばだてて聴く秋の音
琴糸のぷつんと切れて秋の声
糸瓜引く一升瓶を横たへて
糸瓜やオーガニックの化粧水

葛の花　大塚茂子

昨夜の雨綾深みゆく曼珠沙華
大輪の甘き誘惑葛の花
通草の実遥かな物へ捲き登る
秋の声雨戸閉ざすをためらうて
法師蟬洗ひ晒しの靴ならぶ

色なき風　河野はるみ

秋日傘ステッキのごと老紳士
犬連れの夫人くるくる秋日傘
野仏の一輪いだく彼岸花
曼珠沙華蕊を開くや舞扇
りんだうの赤紫や妣に供ふ

秋簾　松宮保人

電線に群れて狙ふや稲雀
大の字になり寝転ぶや秋簾
秋簾団欒の声聞こえけり
うつらうつら妻の読書や秋めける
輪郭を雲に残せし観月会

原風景　池田雅夫

秋空の高み高みへ昇る鳥
紅葉の峰の連なり見て一日
柿たわわ原風景の茅葺家
秋の野や軽トラックのタイヤ痕
秋苑の池の細波織る錦

煙草盆　檜鼻ことは

雲の峰二十歳の父の肩車
棚行や先祖となりし父と母
朝顔や今は用無き煙草盆
大叔父の話などして秋簾
街道の影を踏み行く秋はじめ

八月　荒井倶子

土用波帰還かなはぬ父の骨
八月や昭和の悲劇語りつぐ
グランドの土掻く球児夏終る
約束は叶はぬままに夏の果
残暑なほ弛びしままの脳の箍

棹一本　保坂翔太

急流を棹一本ぞ雲の峰
虫干の舞台衣装や旅一座
金髪の草月流や夏の菊
天然色の笛吹童子夜の秋
松韻のさやかなる宿秋近し

潮騒　松島寛久

潮騒に遠回りして星月夜
渚にて水掛け合うて恋しぶく
銭もろても動かぬつもり雨蛙
おぼつかぬ馬鈴薯むく子のカレー食ふ
深海の魚も夜遊び星月夜

残暑　飛永鼓

葛青しかつて栄えし酒蔵に
忍といふ老いの一日の残暑かな
雁渡しあれが最後の手紙かも
雁渡し歳月の研ぐ東尋坊
葛の花に誘はれ入るや道の駅

露の世に　福田千春

ここからは結界畦の彼岸花
妣を訪へば咲き乱るるや彼岸花
残る蚊や花殻つみし庭手入
乱れ咲く名も知らぬ草露時雨
朝露の光の中の夜勤明け

蔦紅葉　原田自然

晩年の不安と安堵蔦かづら
鯖街道かつて商家や蔦もみぢ
整然とチアガールゆく蔦もみぢ
思ひ出を句碑と語らふ蔦もみぢ
蔦かづら見上げて通る車椅子

秋の蝶　松山清子

鰯雲迎への車遅れがち
夕菅や前行く人の背を追ひて
東京に古墳のありて赤蜻蛉
豪雨晴れつがひで来たる秋の蝶
雷鳴や夜の読書の落着かず

羽化　野口和子

飛び立つや羽化したばかり秋の蝶
帰省子を迎へ変はらぬ小さき駅
空に浮くうさぎやハート遠花火
懐かしき会話飛び交ふ盆の道
葡萄棚不出来謝る園主かな

泣きぼくろ　石田慶子

打水す双子の姉に泣きぼくろ
園児らの歓声悲鳴水を打つ
独り居の耳に優しい風鈴買ふ
驟雨来て印字ぼやける処方箋
叔父の名を初めて知りし敗戦日

秋初め　葛城千世子

秋初め渡り廊下に水かげろふ
ゴンドラに添うて撮らるる秋初め
今朝の秋散歩と共に雲流る
秋晴や考へる鷺橋の下
子供らのもぎたて葡萄光りだす

台風裡　石川理恵

旧友の個展たづぬる台風裡
台風を追ふやうに旅始めけり
落鮎の釣果を競ふをの子たち
落鮎のコース料理に松竹梅
錆鮎に美しく串打たれけり

紅葉山　西浦千枝子

初秋や旅あきらめし腰痛に
一つ家を終の住処に秋桜
鳥たちの声の降りくる葡萄園
紅葉を視野に納めて歩を伸ばす
一万歩の先に広ごる紅葉山

秋の風　下川光子

窓開く今朝一番の秋の風
十人の体育座り秋の風
秋風を連れて一気に車夫走る
ぱちぱちと落鮎焼けて山暮し
山小屋の主替はらず下り鮎

赤とんぼ　田中章嘉

名月や広間を開けて句会する
赤とんぼなれなれしくも肩に来て
秋雨や駅に迎への母が来て
曼珠沙華庭に一本咲きにけり
秋遍路脚半に付くは草の種

本当は教えたくない、特集 私のお勧め吟行地
朝妻 力／岩上明美／金澤諒和
川嶋ぱんだ／西生ゆかり
佐藤文子／下岡友加／鈴木しげを
とみた環／花尻万博／山﨑十生
横山航路／吉田千嘉子

＊今月の華
福永法弘／水野悦子

＊巻頭三句
森賀まり／亀井雉子男／西村麒麟
古田紀一／上田日差子／浅井民子

＊俳句と短歌の10作競詠
遠藤容代＋笠木 拓

＊好評連載
伊野孝行 人はなぜ風景を描くのか
小川楓子 俳壇ランドスケープ
青木亮人 句の手触り、俳人の響き
大西 朋 俳句へのまなざし
井上泰至 俳句小説・ウラヌスの鑞
橋本喜夫 写生はレトリック
藤村公洋 俳句のつまみ
神作研一 てのひらの江戸 ―古典籍を旅する
堀田季何 諸家書架
石井隆司 たもとほる 俳句よもやま話
山本 潔 一望百里

俳句四季 Haiku Shiki
2026年11月号　10月20日発売　定価1300円（税込）
https://www.tokyoshiki.co.jp/　東京四季出版
〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

季音花

花野

渋谷きいち

夕花野風に消さるるハーモニカ
秋燕や役場無線の尋人
母の口許真似て鬼灯鳴らすまで
山路来てこぼれ萩なる点描画
峠山坂越えて老夫に萩の園

初秋の鎌倉

越田栄子

切通し初秋の風の肌に沁む
大仏の螺髪なでたき秋はじめ
半眼の大仏の聴く秋の声
結界の解かれし寺や秋の声
露けしや灯火居並ぶ八幡宮

嵯峨の宿

染谷風子

ボンボンを銀の菓子器に夜の秋
大文字消えて一献嵯峨の宿
星合の空よ鑽火の花川戸
潮騒の海の暮色よ稲光
曲屋に点る一燈秋の声

秋の倣ひ

菅原卓郎

峡の田の穂波逆巻く初あらし
路地奥に井戸汲む音や地蔵盆
頻き降るや五山の燈に月の雨
竹春の銘の失すれし詣り墓
水琴窟の闇の余韻も秋の声

秋の声

梅澤輝翠

書肆の灯よ往き交ふ人も秋めけり
秋袷今織しむる伊達男
宵の道ふり向かしむる秋の声
東の空ほの赤うして遠花火
休日のとろりと昼の無花果煮

谷紅葉　新暦文

四万十を渡る秋風沈下橋
落鮎の骨酒の香や吉野川
群青の秘境の崖に谷紅葉
片恋や風に溢るる萩の花
鳶の眼が覆ふ眼下の大花野

土用　池田珪子

鰻の日高校生の出前持
鰻重の出前の風呂敷縞更紗
いつの間に息子が店主鰻の日
絶滅を心配しつつ鰻食み
寛解と言ひて鰻を食みし日も

梨届く　清水桂子

午後三時影くつきりと大暑かな
歳時記に抗ふやうに木槿咲く
夕化粧ひと日の恋に匂ひ立つ
泣き止まぬ子にラバイを法師蟬
添へ書きに息災とだけ梨届く

巻スカート　宮﨑チアキ

地蔵盆子等にも同じ菓子袋
留守宅の一戸壊され秋夕焼
新涼や巻スカートの足捌き
天つ風総身に受くる竹の春
静もれる村の湖面や雁渡る

語り部　鈴木玲子

カンナ燃ゆなほ穏やかに青き海
かなかなの鳴きて静まる夕べかな
あれやこれやと備へ台風じつと待つ
崩れし足場台風の迷走す
語り部のお国訛や草の花

しまなみ海道　野村美子

今治やしまなみ海道秋夕焼
五色沼神秘さ増して秋めけり
地蔵盆路地の提灯ほの暗し
秋の浜巻き貝探す旅の朝
旅の宿命を燃やす流れ星

いよいよ秋　西幅公子

跳びかへり踊りの列や風の盆
開け放し風遊ばする処暑の部屋
秋雨やほつと農家の骨休み
座敷わらしも舞ひ戻る風の盆
道に影日に日に長く処暑の朝

秋初　髙橋満耶子

勤行の鉦の音色や秋初
宿坊の提灯ともる虫の秋
次次と地球に異変秋出水
小窓より風に乗り来し秋の声
影法師すこし背伸びの秋日和

初秋の候　山岸久美子

朝顔のブルーが映ゆる白い壁
遊覧の海は白波処暑の風
海の幸心満たして秋一夜
校庭はひぐらしのみぞ日の西に
つくつくし想ひの丈を鳴きつくす

処暑　菅原真理

多感なる少女を招く酔芙蓉
佇めば木洩れ日の中秋の声
処暑の雨とぎれとぎれの子の寝息
久に逢ふ友昔語りの良夜かな
旅鞄ふはりと頬に処暑の風

大花野　霜多光代

一群離れ夕陽を浴びて帰燕かな
花野去りその残像に追慕せり
花野ゆく我を忘れて独りゆく
特攻機飛びたちし地や大花野
遠いくさ帰燕は大き弧を描き

秋声　岡田宣子

女郎花若き僧侶の誦経かな
立ち入るや金山跡の秋の声
天文台尾を引き迫る流れ星
秋口のショーウィンドーは黄金色
根つこ付き郷（さと）の枝豆届きけり

菊日和　小林京子

五指折りて十七音を秋初め
秋の沼多彩なれども閑かなり
菊日和恩賜庭園浜離宮
水澄むや恋の静女の白拍子
仲麻呂の望郷に見し月夜かな

山日記　森和子

新蕎麦や生まれも育ちも箸の国
鄙びたる店の趣走り蕎麦
蜩を蟬塚に聞く立石寺
蜩の終りのやうに鳴き出でし
かなかなや遺品の中に山日記

赤蜻蛉　綿貫ひさの

卵銜へ蟻騒乱の除草剤
盂蘭盆会父母に冥加の鐘三度
深閑とビルの工事場盆休み
かなかなや重き荷背負ふ上り坂
群れ飛ぶや母校の庭に赤蜻蛉

やうやう秋に　寺内洋子

程遠き則天去私や敬老日
老い支度できぬ怠惰や敬老日
忘る間もなく来し天災秋暑し
待宵を飲むや喰ふやの池の端
自然薯を掘りたる穴の大きさよ

秋の朝　南條きわゑ

月仰ぎ亀の散歩や秋の朝
秋早朝犬に挨拶二度三度
秋茄子や糠漬の味薄きかな
初秋に手紙書く字の早さかな
秋桜成長早き乙女かな

秋出水　岡本祥子

人里に雨脚早き秋出水
惨状にただ立ちつくす秋出水
いきなりの飲み込むちから秋出水
秘やかに魔物越え来る台風圏
術も無く台風圏の小さき村

処暑の朝　　森下美智枝

そそくさと願ひごとせり流星
秋の豪雨道路は川に成りにけり
台風の去るをひたすら待つ今宵
処暑の朝二歳とつとこすべり台
処暑の庭むしり尽くして心地良し

走り蕎麦　　湯浅和

ふる里や姉が手打ちの走り蕎麦
手造りの笊にぼつち盛り走り蕎麦
出迎へは和紙行灯とかなかなと
八月やじつと我慢の風見鶏
八月や駅舎で婆が「またおいで」

麦酒　　畑宮栄子

麦酒干す漢の口に白きひげ
月下美人一夜限りを写生する
登山靴棚の隅へと追ひやられ
蟬時雨精一杯鳴き生き急ぐ
電車中上手に化粧する浴衣の娘

秋の朝・秋の夜　　野平美紗子

今生の幸せ願ふ秋の夜
今日あるは母の御蔭と思ふ秋
吾子四人と流れ星追ふ澄む夜空
手伝ひの子に感謝のことば秋の暮
仏前に感謝つぶやく秋の朝

☆　　☆

『水明誌』を繙く（水明八月号）

伊藤幹哲（「馬酔木」同人）

終点のバスの網棚カーネーション

近藤徹平

恥ずかしながら、私は日頃から忘れ物が多い。

あれは淀の京都競馬場からの帰りであった。私は京阪電車の網棚にバッグを忘れた。万馬券は入っていなかった。だが、人に借りた大事なものが入っていた。信頼とか期待とか大切な何かを同時に失ったと悟った。今でもあの時の罪悪感を拭うことはできない。

さて掲句は母の日のことだろう。名詞を連ねた俳句がゆえに多くの余白がある。故に、それぞれの読み手に物語が生じる。母へのカーネーションの花束を網棚から手に戻す成人を想像するも良し。子どもに花束を渡す姿を想像するも良し。

あるいは私のように、誰かが網棚にカーネーションの花束を置き忘れたままにしてしまったのかもしれない。そう読むときの異界との狭間に取り残されているような感覚とカーネーションの華やぎとは異色の取り合わせだと思って心惹かれた。……が、とにかく荷物は網棚に置かないことだ。

黙の森から山霊のこゑ朧の夜

保坂翔太

中学の同級生の片岡真伊（国際日本文化研究センター准教授）は地霊（ゲニウス・ロキ）を研究している。

古来、亡くなった人の霊は土地に留まると信じられた。そうして人の霊が集まると、地名そのものが呪詞としての役割を帯びていく。消そうとしてもどこかに必ずその性質を残してしまう、その土地の固有の記憶や霊感が生じるからである。これが地霊だ。例えば芭蕉が名所の句には無季の句があってもよいといったのは、こうした背景がある。

さて掲句は「静まりかえった森から山の精霊の声が聞こえる、こんな朧の夜には。」といった意である。夜、朧に包まれた森は夢幻の世界で、まるでタイムスリップでもしたかのようである。

自らも山と一体となった感覚の中、山霊の声が作者に聞こえた。聖地たる山の神の声とも考えられるが、やはり山そのものから湧いてきた多くの祖霊の声なのだろうと思う。

現代俳句鑑賞

網野月を

蟬時雨部屋の数だけ静かなり　雨宮きぬよ
何もかも事旧りてをり萩咲いて
敗戦日大きな川を見てをりぬ
（句誌「椢」10月号・萩の花より）

第一句目は聴覚の句である。にもかかわらず景が浮かんでくるのである。作者のマジックにそのまま引き込まれる句である。第二句目は、上五中七からは景は結べない。読者に任されているというよりも座五の「萩咲いて」が唯一の景として明示したいという作者の意図を感じるのである。作者の眼前には萩の花だけが存在していて、人生の全ての事が「旧りて」いるのである。芭蕉の「さまざまの事思ひ出す桜かな」を凌駕する句である。第三句目は、「敗戦日」以来八十年余の「大きな川」を見続け来た作者の思いの句であろう。作者は九月二十二日に永眠された。

ひた向きになる事少な蠅叩　渡辺誠一郎
（「俳壇」8月号・金華山より）

一読、諧謔の句であるが、そんなことはない。それは作者の述法に嵌まってしまっていることになる。座五の「蠅叩」からは日常茶飯事に奔走している様子が目に浮かぶ。しかしながら反語的に読めば、情熱を向ける事柄を搾って、一点に力を集中しているとも解釈できる。そう解釈すると「蠅叩」は謙遜であろうか。他に「島の名に金を戴き夏はじめ」がある。

空蟬の痒くてならぬ割れ目かな　久保純夫
（「俳句」8月号・花木集＋＋より）

作者独特の感性のなせる業である。空蟬の割れ目に痒さを感じるというのはどういうことなのだろうか。大人の階段を上る際の忸怩たる思いのようなものを思い出して表現しているように筆者には解されるのであるが。他に「右左向けぇ真ん中とうがらし」がある。

硝子掃く箒の音や夏館　髙柳克弘
（「俳句」8月号・鎌と槌　より）

この「硝子」は窓ガラスなのかワイングラスなどの食器なのかは分からない。むしろそちらに焦点を故意に向けないで音のみにフォーカスしている。「硝子掃く箒の音」は独特な音色を有しているということに傾注しているのだ。微細な音

色を聞き分ける作者の繊細な感覚に敬服する。他に「蓑虫や一生縁なき鎌と槌」がある。

蘭薫る珈琲香る楽器街　梅澤輝翠
花冷えの外階段のハイヒール
のら猫は幾多の名持ち日向ぼこ
（句集『四季吟詠句集40』より）

第一句目に対して夏井いつきは本句集の中で「薫り高い蘭の鉢を飾る店先もあれば、どこからともなく挽立ての珈琲の香がしてくる。そんな心満ち足りた楽器街」と評している。将にこの評に尽きる。「薫る」と「香る」の使い分けもさることながら、「楽器街」の場の設定がこの句の肝であろうと考えられる。第二句目は、中七座五の「外階段のハイヒール」の知覚が、視覚ではなく聴覚によるものだということが上五の「花冷え」という時候の季語にぴったりと符合している。第三句目は、作者のたぶん猫好きであろうことを想像してしまう。この「のら猫」の出没する先々で、同様の猫好きの皆さんは勝手に名前を付けて愛情の眼差しを向けているのである。

散り敷きて再び咲かす花明り
短日を使ひ切つたる庭仕事
音もなく泳ぎ切る蛇沼明り
隠れ十字の菩薩の膝に瑠璃蜥蜴
病葉や言葉貧しく一日終ふ　丸山マスミ
（句集『花明り』より）

第一句目は句集の題にもなっている「花明り」の句である。句集の装画の紫木蓮も、また向日葵などの章ごとのカットも作者のお手になるものであるという。これらの画の見事さが掲載句と相俟って相乗効果を生み出しているようだ。梢に咲いた花が、「散り敷きて」の後、地上に於いてもまた「花明り」を放っているようだ、と鑑賞した。花の命に託して深読みが出来る句である。第二句目は座五の「庭仕事」の量の多さを云い得ている。「短日」つまり冬の一日を使い切って庭仕事をしたということである。作者はそうした多くの「庭仕事」を愉しんでいる節が垣間見える。第三句目は確か筆者がご一緒する句会で出句された句ではないだろうか。その選句の際にドキッとしたのである。また作者が分かった時にもう一度ドキッとしたのを覚えている。作者は叙景句を基本として含蓄の深い句を読む作家であるというイメージを勝手に抱いていたのだが、この一句で作家のイメージが一新した。自然界の細部に目を凝らして何とシリアスな眼差しでものをみているのであろうと思ったのである。「蛇」という言わばネガティヴな存在に対して「沼明り」の光明を与えている。仏の慈悲心のような感覚を覚える。

第四句目は第三句目の自然界の背景から人為の背景にシチュエーションを転換している。「瑠璃蜥蜴」の主人公を「菩薩の膝」に設え、加えてその「菩薩」は「隠れ十字」を背負っているのである。此処まで巧妙な構成力は他に類がないだろう。第五句目は一読、中七の「言葉貧しく」に句意の中心があるように思ってしまうが、実は上五の「…や」の切れによって季語「病葉」を中心に鑑賞するのが作者の本意であろうと推測した。どんなに言葉を尽くしても「病葉」の在り様と美しさを表現しきれない、というような思いを筆者は感じるのである。

新同人紹介

── 令和８年 ──



石井直子

水明入会　令和五年
所属句会　若楠句会

花の雨摩天楼行くダルメシアン
五月雨や若き僧侶の駆け降り来
ハンモック見上ぐる山の荒荒し
椎の実の落つる要塞跡地かな
迷ひ込む別荘街の冬紅葉

この度は水明同人にお迎え頂きありがとうございます。まだまだ未熟ですが、鶴城先生の指導のもと先輩方、お仲間と楽しく学ばせて頂いております。
俳句を通して四季の移ろいを表現できればと思います。
どうぞよろしくお願いいたします。



石黒由美子

水明入会　令和六年
所属句会　木崎サークル、コクーンシティカルチャー俳句教室

へぎ盛りのみどり匂へる走り蕎麦
海霧湧くやブイを離るる太ロープ
霧こめて異国めきたる北の街
村中の阿羅漢仰ぐ盆の月
この露地に駄菓子屋ありし盆の月

この度は水明同人にお迎えいただきありがとうございます。
夫と訪ねる旅先を記憶に残したいと、俳句を学び始めました。五明先生の手ほどきをいただき旅の思い出を俳句にすることを少しづつ学んでゆきたいと思っております。



伊藤美津子

水明入会　令和六年
所属句会　めだか句会、若楠句会

子の小言「さうね」と返す冬うらら
遠足やエプロン結ぶ午前五時
三社祭法被鉢巻心意気
染め抜きの背文字躍るや夏祭
走馬燈柱時計の「ボン」ひとつ

この度は、水明同人にお迎え頂きありがとうございます。
退職後、俳句を始めて二年半程になります。まだまだ初歩の域を出られずにいます。そんな未熟な私ですが、月を先生、鶴城先生、先輩の方々のご指導のもと、これからも努力し、俳句の世界を楽しんで参りたいと思います。
どうぞよろしくお願い致します。



木谷葉子

水明入会　令和五年
所属句会　若楠句会

待つ事は生きる術なり磯巾着
走馬灯解く記憶の無音かな
朝顔や良き事だけを告ぐる吾子
新涼や水道水に張りのあり
闇に浮く白川郷や冬景色

この度は水明同人にお迎え頂きまして、ありがとうございます。
これまで鶴城先生のご指導を頂きまして、句会の皆様と楽しく学ばせて頂き感謝しております。
三年前の市民講座で初めて俳句を作り、試行錯誤の日々ですが、今後ともどうぞ宜しくお願い致します。



木村小麦

水明入会　令和三年
所属句会　たかんな俳句会、
　　繭の会

白服が気障には見えぬ男ぶり
バンガロー研ぎ澄まされし夜の静寂
岩肌を間近に眺め舟遊
揺するまい手花火の玉落とすまい
読みさしの本に栞を夕月夜

水明同人にお迎え頂きありがとうございます。ただただ句会に参加するだけで良いと思って参加させて頂いた私ですが、向上したいとの欲も出てまいりました。
鬼之介先生、月を先生、諸先輩方のご指導のもと、学びを深めていきたいと思っております。よろしくお願いいたします。



菅原靖子

水明入会　令和七年
所属句会　あゆみの会

ほろ酔ひの躓く足に犬ふぐり
散歩径一人静に逢ふ日課
花の名に哲学ありや百日紅
娘より小さきブーケの吾亦紅
お気に入り食事処の冬青の実

このたびは水明俳句会同人にお迎え頂き誠にありがとうございます。

境先生のご指導のもと、先輩の皆様方に助けられ心より感謝しております。

これからも俳句を通して自然とのふれあいを大事にし精進してまいりますので宜しくお願い申し上げます。



三浦真由美

水明入会　令和五年
所属句会　若楠句会

赤ちやんの下の歯二本水温む
駅前の駐在所留守燕の子
学食のカレー大盛り梅雨上る
亡き伯父の畑は花野となりにけり
カーラジオから中島みゆき星月夜

この度は水明同人にお迎えいただきありがとうございます。

友人に誘われ、何も知らぬまま入れていただいた句会ですが、鶴城先生のご指導のもと熱心な句友に囲まれ、楽しく俳句を学んでいます。自然の移ろいを感じ、言葉を紡いでいけたらと思っています。どうぞ宜しくお願い致します。



門真宏治

水明入会　令和五年
所属句会　若楠句会

今日ありし良きこと見つけ初日記
大欅揺れず靡かず寒に入る
寒の水含み地球の音を聴く
退院日眩しかりけり柿若葉
秋時雨傘は要らぬと去りし友

今回、同人のお仲間入りさせていただきましたこと、うれしく存じます。

私、高齢ではございますが、老いを嘆くのではなく、俳句を通して生きる喜びや、日常の楽しさを見つけて行ければと思っております。鶴城先生他諸先生、諸先輩・句友の皆様に感謝しながら励んでまいる所存です。よろしくご指導のほどお願い申し上げます。

昔話あれこれ61

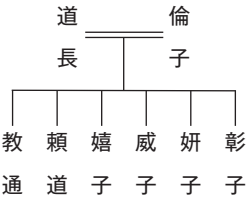
丸山マスミ

道長公の北の方

道長公には**二人の北の方**がいた。

一人は**源雅信の娘倫子。**

倫子は、四人の女君、二人の男君を生んだ。



女君達は

彰子は、一条院の中宮
後一条帝・後朱雀帝の母

妍子は、内侍督を経て、三条帝の后。

威子は、内侍督を経て、後一条帝の后。

嬉子も、内侍督を経て、後朱雀帝女御。

男君達は

頼道は、関白左大臣。

教通は、内大臣兼左大将。

倫子の栄華と幸運

倫子は人臣でありながら、帝の生母であり、**准三宮**(『じゅさんぐう』三宮(太皇太后・皇太后・皇后)に准じた年官・年爵を給与される経済的特権。)**の待遇を受けた。**

倫子は、自由で身軽で好奇心に富み、様々な見ものとか、法会には必ず出掛けていた。

孫にあたる帝とか、后となった、女君の御所にも気軽に出かけて行った。

道長公との間柄は四十年にもなると思われるが、道長公の愛情は深く、尊重すべきお方として大切にしている。

句集喝采

菅原卓郎

◆村上喜代子「刻　印」　本阿弥書店

著者略歴　一九四三年山口県下関市生れ。一九七六年「濱」入会、大野林火に師事。一九九一年第十五回俳人協会新人賞受賞。二〇〇五年「いには」創刊、主宰。二〇二四年第三十九回俳人協会評論賞受賞。俳人協会評議員。俳人協会千葉県支部支部長。

令和七年は昭和百年並びに戦後八十年の節目の年に自らの祝いとして第六句集である本刊を上梓した。俳句は来し方の心の日記で刻印であるとの思いから句集名を決めたとの事。

巣立ちとは捨て身よ風を得るまでは
麦秋や書架に不動の大百科
桜咲く三月十一日がまた
富士塚の天辺に穴出でし蟻

第一句、本棚に坐す百科辞典は一種のステータスシンボルでありパソコンや電子辞書が普及した現在では正に不動である。第二句、鳥類の巣立ちは命懸けである。中七の通り捨て身で飛び降り風に乗れば大成功である。自然界の淘汰の現実。

なにもかも眩しかりけり更衣
二人とはかくおもはゆしビール飲む
こと無くば帰らぬ郷や桜東風
芽が出ればわかると種を蒔きにけり

第二句、確かに男女問わず二人だけだと会話の切出しが掴めず沈黙が続く事がある。それを解消するのが冷えたビールであり以後は怒濤の時が過ぎてゆくのである。第四句、同じ科目の種を蒔くとこの句の通り発芽段階で判別できればいいが成長するまで区別が付き難い品種も多々ある。人間も芽が出た段階で良し悪しが付けば宜しいのだが。

◆宍野宏治「大南風」　北斗書房

著者略歴　一九四七年大阪市生れ。一九九七年「櫟」入会。二〇〇九年「櫟」同人。二〇二〇年朝日新聞愛媛俳壇年間最優秀賞受賞。二〇二五年第六十四回俳人協会全国俳句大会大会賞受賞。「櫟」殻斗同人。俳人協会会員。

句集を拝読して全般に平易な言葉でありながら想像を喚起する句が多く一気に読み終えた。日々の発見や感動を句に託して行くと共に団塊の世代としての生き方も大事にし人としての更なる成長を図りたいと述べている。

水馬その水の輪を抜けきれず
余生とは妻とゐること秋刀魚焼く
人里につかず離れず曼珠沙華
人間に自然治癒力山眠る

第一句、水馬の生態を具に観察しないとこういう発想に至らない。人間の生まれ持つ業にも繋がる句ではなかろうか。第四句、睡眠による回復を山と人間に当て嵌め医療関係に従事していた作者ならではの思いであり季語が生きている。

竹馬を降りて地球に戻りけり
日焼子をぽんと吐き出す滑り台
格別なことは話さぬ良夜かな
しばらくは声で闘ふ寒稽古

第二句、渦巻き型滑り台であろうか。次から次に真っ黒な子供が飛び出て来る。中七でお菓子の製造工場を連想してしまう。第四句、四肢が解れるまで声のみの闘い。剣道であろうか真摯な稽古の中に可笑しみを感じてしまう。エンジンがかかれば本来の剣士の眼に戻り手も出るのである。

水明集

山本鬼之介　選

土壁を咲き尽くしをり凌霄花
星涼し奄美の浜に阿檀の実
ベランダにシーツ舞ふ黙日の盛
北窓に白影揺るる半夏生
夏草や門柱残る移住跡

さいたま　寺町知子

下草に李転がり旬を告ぐ
安達太良の空のささめき夏の星
あかあかと招く夜店の射的かな
棚田いま友の終の地夏の果
鉛筆を削る音止み秋隣

越谷　阿部幸代

線香の細き煙や夏茜
霊園に残る武蔵野夏茜
裳裾引く飛鳥美人や旱星
着流しの涼しく立てり京都駅
大西日社殿の屋根を染めあぐる

反町　修

片側に並ぶ古書店片かげり
腰曲げて捨苗を挿す影ひとつ
蹲踞や水面に掬ふ夏茜
つつがなき同窓集ふ夏座敷
竹林のそよ風を呼ぶ夏座敷

本橋稀香

窓を打つ蛾の親しさよ夫ならむ
熱帯夜水をごくりと影法師
日雷雨より先に帰宅せり
肩上げの躾引き抜く夏祭
夏の果不要不急の身となれり

平塚　丸屋詠子

打水も修業の一つ若女将
打水や水神祀らるる社
神奈備にあまねく満つる秋の声
打ち揃ふ手足の進む盆踊
鬼伝説の山渡りゆく霧時雨

さいたま　石井直子

主なきアトリエを抱く大西日
万屋に店晒しされ螢籠
終バスを降り古里の夏の星
脱衣所に錆ぶる壁掛け扇風機
園児らをまとめて寝かす古団扇

さいたま　皆川更穂

佐渡の海足湯にひとり大夕焼
旅荷解き名物まづは冷蔵庫
水やりは二歳の仕事ミニトマト
西瓜食む指の先まで巡るよに
トマト山盛りマラソンの給水所

田中弘子

塩を吹く猛暑工事の作業服
トランプを射落とす射的夏祭り
勤行の吾に向かうて蚊の羽音
軍神に負けるものかと旱星
城跡の車中泊好し夏の星

飯田忠男

打水や一番星が姿見せ
水打ちて入り日ゆらゆら湯気の中
星月夜微かに聞こゆ街の音
夏空や大雲塊が並び立ち
黒雲や雷鳴乗せて飛び回り

利根　倉田星歩

眠らざるビル街旱星高し
旱星テールランプの連なりて
縁側に投げ出す足や夏茜
平等に年取る従姉妹ソーダ水
「海坂」の城下もかくや蟬時雨

さいたま　三浦真由美

お日柄も佳く神前は花畑
茄子の馬止めてご先祖吾を叱る
グールドの呟くピアノ夜の秋
恐竜の卵の椅子に座せば処暑
ひめゆりのガマに影入る盆の月

森下山菜

夕凪や朱(あけ)の鳥居の厳島
夕凪や漁の小舟の戻り来る
戸隠の木立の黙よ夏の果
日の暮れを待てず花火を選る子かな
秋近しそよと風吹く夕べかな

内田章子

霊園の日暮れは早し秋茗荷
「マイウェイ」を爪弾くことも盆支度
返信と想ふ風あり今朝の秋
風に聴く明日の天気敗戦日
折鶴に突風絡む終戦日

大阪　遠藤人美

初鮎の川面ひらりと艶姿
雷や猫も鴉も総毛立つ
青鷺の佇む気品孤高の目
夏の蝶坐禅の肩を一巡り
盆の風バイクの僧の袈裟なびく

さいたま　綿引まりこ

線香花火なぜか短き恋ばかり
水打てば手元は狂ふ美男へと
夕凪の「台場」を渡る「ゆりかもめ」
打水や隣家先へも御裾分け
汗光る講釈師いま山場なり

吉　川　杉浦千祐

地震ありて酷暑もありて浮世かな
気が付けば被災地に舞ふ蜻蛉かな
戒名に残る違和感盆灯籠
身に入むや昭和の硬貨まばらなり
新涼や托鉢僧の鈴の音

さいたま　元田亮一

立ちすくむ犬の三歩や日の盛
置き去りの防護服めく蟬の殻
生涯は赤筆まみれ早星
草叢を羽化ほやほやの夏茜
じりじりと年重なりぬ油蟬

平野　楽

大空の少し波打つ大暑かな
喉越しのざるそばに咽せ大暑かな
如雨露口降りては離る夏茜
遺されし土地や家財や草いきれ
水遣りにしばし離るる雀かな

さいたま　秋谷風舎

ぴかぴかのアメ車現る日の盛
お点前を全てずずずと日の盛
ハンディファン越しの挨拶日の盛
理科室の床にどんぶり夏休
空蟬を３Ｄプリンターへと

石関六弦

打水に生気の戻る紺暖簾
かたつむり物騒な雨来る予報
踏み跡のくぼむ石段かたつぶり
急登の殿は父夏の山
星逝くや眉間に受くる御来光

上　尾　室井早都子

レモンパイぼろぼろになりたくて切る
青蔦や何もしなくて良いと母
ごきぶりや噂はひそと滲み出る
ゆつくりと権利を奪ふ黴増ゆる
青芭蕉いつもこの人旗当番

さいたま　吉川拓真

鈍色の海にぽつんと浜日傘
白服も雲も茜に浜の夕
柘榴色のマニキュア塗りて夏至の夜
風を入れ締むる夏帯浅縹
形見にと瑠璃紺の絽一つ紋

東京　山中いちい

土用入勝負は午前先手必勝
守宮とは家守森守子守かな
仲間から離るる二人夕凪の浜
青紫蘇の天ぷらからりもう一本
皇后の気品溢るる夏衣装

さいたま　川島夕峰

夏茜雨の合ひ間の木のベンチ
羽音残し耳すれすれに夏茜
旱星明日は未定にしておきぬ
旱星手合はす胸の高鳴りぬ
年波に即かず離れず青芒

さいたま　今西　操

歳忘れいつも元気に水中花
独り言じつと聞きゐる水中花
顔役の指示が飛び交ふ夏祭
酷暑日とや身を焼くほどの照り返し
身の丈に合ひたる暮し冷奴

竹澤和子

揚花火ハートの形して消ゆ
花火終へ皆一斉に動き出す
盆用意額の姑の微笑みて
暑き日や家空にして村総出
宮参り石百段の秋暑し

若狭　山﨑郁子

山苺指先そつと触れてみる
蝦夷富士や噴石肌に岩桔梗
山の名にアイヌの由来蝦夷登山
空高し豪華客船入港す
秋暑し小樽運河の石畳

若狭　畠中風花

水音激しその白鷺の狩の技
羽ばたきの練習足らぬまま巣立
灰色の産毛つんつんつばめの子
日もすがら舳先陣取る川鵜かな
白桃や余白のやうな昼の月

横浜　石井妙子

一年生ひまはり咲かせ二重丸
良き人と出会ふときめき夏茜
三角ベースで遊びし仲間夏茜
被爆者リスト今夜も照らす旱星
旱星叫ぶは孤児に早や水を

さいたま　門真宏治

五月雨の滑り落つるは傘の上
流し目に惹きつけらるる夏芝居
夏の蝶一羽ふはりと舞ひ上がり
暑気払ひ飲めばますます暑くなり
遠き日の父の愛せしところてん

さいたま　鈴木和子

恍惚の母の転院百日紅
庭先を風に転がる蟬の殻
シャッターの滲むペンキ絵大西日
戦国のなごりの堀に蓮開く
お迎への親を待つ園西日さす

阿部貞代

山門に傘立てかけてある雨月
風一陣雨を呼びたる夏の雲
灼熱の赤き鳥居に影もなし
熱風に雲動きけり大伽藍
青空を背中に負ひて秋近し

持谷ひさお

青簾大樹かそけく見ゆるかな
羅や裾に小さき染みひとつ
出窓下棕櫚の花みな垂れてをり
朝顔や子ら来てひらく観察帳
朝顔や走り去りたる風にゆれ

金沢　小島つぶ金

あめんぼう風が邪魔する徒競走
水馬波紋土俵に四股を踏む
青嵐田舎暮らしの戸をたたく
バーベキューの紙皿飛ばす青嵐
病室へ山の香を連れ青嵐

さいたま　北出久美子

目ん玉に目薬熱き大暑かな
阿波踊り跳ぬる小股の芸となり
老いかしら病かしらと夏の宵
達磨さんが転んだ蜥蜴の逃げ足
舞妓はん打ち水そろり通りやんせ

三郷　戒能邦人

夏茜群れて告げ来る夕餉かな
夏茜寄り道したる水車小屋
異常気象いつか地球も旱星
少年の盆の窪かな夏の果
夏座敷上がり框の段差かな

さいたま　木谷葉子

片蔭のずれゆくままに立ち話
庖丁を研ぎてもてなす夏料理
片蔭に憩ふ男ら首タオル
バンガロー研ぎ澄まされし夜の静寂
揺するまじ手花火の玉落とすまじ

川口　木村小麦

虫干しや般若翁（はんにやおきな）の面並ぶ　　さいたま　小野町子
虫干しや室町の代の能衣装
朝日さす名水点（めいすいだて）や瑠璃の碗
土用凪人影のなき浜辺かな
たつぷりと土用蜆の羽反椀（はそりわん）

手花火や膝美しく折る乙女　　上野和子
少年にうすき髭生え祭笛
母の目を見ぬ少年や九月尽
短冊の文字の掠れや星祭
星飛んで今宵誰かの「さやうなら」

梅雨明けは友の忌明けや空青し　　菅原靖子
老夫婦はベンチで氷菓童心に
雲の峰九回裏のホームラン
砂浜の二人が見ゐる雲の峰
舌鼓蒔絵の碗の鱧牡丹

睡蓮の微かに揺れて魚の影　　駒谷行雄
模様替へショーウィンドゥは秋の色
雌鳴かばこの二倍なる蟬しぐれ
鐘鳴りて突きぬくる空原爆忌
敗戦日青春に散りし叔父二人

露の夜や昭和の歌をウクレレで　　所沢　飯室夏江
露時雨レンガ造りの蒸留場
食虫植物大口開けて朝の露
吊り橋は振り向くなかれ露時雨
定位置に鉢植ゑ据ゑて今朝の秋

試合終へ涙の球児残暑かな　　若狭　松村笑風
帰宅時の開かぬ踏切残暑かな
そこここに増えし更地や秋暑し
秋暑し瓦礫の中をボランティア
お決まりのおかんの煮物秋暑かな

一房の両手にあまるマスカット　　森下風湖
稚が泣き蜩も鳴く日暮れ時
耐えて来し昭和の母や野紺菊
名月と一緒に歩く帰路楽し
数珠あづけ住職が打つ走り蕎麦

ピッチャーは兄でショートや夏休み　　西川夕月
レギュラーのフルスイングや夏休み
盆踊り距離の縮まる他所の人
語り部の老いの目差し終戦日
五湖からの風美しき送り盆

秋立つや復帰の友の音楽会
墓洗ふ父の背中の広さかな
森抜けて海に溢るる碧き秋
工事中小太り目立つ残暑かな
新妻の夜半にことりと濁り酒

さいたま　播磨　進

形かへ雲流れ行く愛鳥日
七月や焼き蚕豆の旨きこと
すかすかの空豆ばかり引当てり
気分屋の義姉にお世辞の夏はじめ
バードデー空に響くや吾子の声

川口　新井のり子

手に取れば土の香残る庭の瓜
透き通る風の来た日よメロン買ふ
片蔭や古本街は賑はひぬ
片蔭に誘導員は骨休め
明易し包丁研げば眠くなり

加藤みち

食べ頃を待つてましたと切るメロン
贈られし久し振りなるメロンの香
夏休み自由研究ひと苦労
片蔭の川面に佇む白い鳥
片蔭を選びて散歩ジグザグに

澤田たみい

吾子を追ふ母の手にする夏帽子
タワマンを額縁の端夕焼窓
病室の窓に音なき遠花火
黙祷の熱き背中や原爆忌
朝凪や方位忘るる風見鶏

さいたま　鈴木藻好

夏の山痩せ尾根を行くワンゲル隊
ランチ後の机上五分の三尺寝
夏の果浮標の残る浜伝ひ
夏の果ひつくり返す貸ボート
通り雨まいまいついと背を正す

石黒由美子

夕顔やきんきんに冷えし酒
まくわうり身の柔軟を呼び起こす
夕顔に負けず劣らず米寿かな
水中花見てほつとして夕支度
若人で熱海の避暑地渋滞に

小川洋子

川柳と俳句の違ひ鰯雲
秋の風実らぬ恋も楽しけり
ひとり家に明かる過ぎますお月様
闘病の期待と不安林檎割る
谷伝ひ愛を歌へず鴨渡る

所沢　関根千恵

笹百合や少女のうなじほのと匂ふ
ホームラン入道雲を突き抜くる
鰺釣りを競ふ親子の影長し
盆僧の大地揺るがす読経かな
盆踊けふも来るかとあの人待つ

和歌山　嶋田洋子

夏きざすぱりつと乾く台布巾
約束を夢路に忘れ長昼寝
白壁を動きゆく影白日傘
雲の峰見知らぬ町で途中下車
どくだみのうそのやうなる白さかな

さいたま　大神満智子

初秋のスパイスカレー夕風に
秋初め野菜の枝の切戻し
蔓伝ふ露は命の水となり
朝露にジーンズの裾盗まるる
椎茸の香りと湿気詰め放題

緒方みき子

塗椀の朱色の中の鱧の白
鉄塔を横さまに行く雲の峰
ビル街の狭間に昇る積乱雲
本堂に焚く線香や盂蘭盆会
盆東風や松島巡る遊覧船

武田重子

巾着田曼珠沙華こそ天下一
祖父のネクタイ孫が締め菊供養
銀巴里や青春遥か夏の果て
秋涼や藍の座布団丸まる身
電線の音符となりて秋鴉

さいたま　森田克己

朝の陽の森の市場の夏野菜
吾が母校の旧き校舎と百日紅
処暑の庭入院長びかぬことを
鎌倉の処暑の夕闇父母の声
野分近き故郷の町の暮色かな

宮代　関谷多美子

碧の空朝顔に問ふ友の無事
列島を拗らす地殻肥後極暑
高原にチェロを背負ひて夏合宿
十二本のチェロ語り合ひ夏送る
十二人のチェロの音が止み夏の暮

さいたま　稲野幸子

子等すべて胸に星持つ星祭
車椅子の母の目線の花畠
あはあはと太陽笑ふ大暑かな
打水やそろそろ父さん帰る頃
珈琲を蒸らすひと手間夏館

羽島秀子

昼下りモネの睡蓮観る大暑
大暑なり獣のやうに生きてみる
図書館の顔触れ替はる大暑かな
打水に明かりの映ゆる先斗町
退勤を労るごとく水を打つ

さいたま　横山礼子

空蟬に詰めてみたくてあんこかな
白杖に頬を預けてバスは夏へ
百日紅白さの奥にワンルーム
潤む目に空掻き回す夾竹桃
用も無き老いの谷間の汗疹かな

大　阪　飯塚智恵子

火輪より生まれ出づるや夏茜
空蟬の転がり黙の別れかな
沿道のサルビアの紅深まりて
参道の冷やし甘酒生き返る
目に見えぬ不安消ゆ夏の大三角

さいたま　関久美子

名月や心洗はれ澄みし夜
待ち侘びし喉に沁み入る新酒かな
新酒酌む語らひ尽きぬ友との夜
最後まで燃ゆる一葉の冬紅葉
初霜や寝ぐせ可愛いい登校児

若　狭　佐野友夏

ぢぢ破顔孫の育てしミニトマト
片蔭に吸ひ寄せらるる通勤路
名句見て次は我もと夏燕
寝坊して赤きトマトにかぶりつく
初推しの力士の浴衣初おろし

さいたま　長谷川おにこ

秋立つや救急車にて老婦人
きんぴらに胡麻を振りかけ秋に入る
八月や被災地の友案じつつ
八月や故郷の友車中泊
頂きし野菜ととのへ盆支度

大　阪　海老名ノルン

トロッコを追ひかけて行く鬼やんま
鵙の贄農夫一人の広き畑
トンネルを抜けて初秋の谷川岳
盆踊また一人抜け遠巻きに
マチュピチュに秋色広がり人盛る

さいたま　山下ユリ子

打水に消えゆくミッキーマウスの目
打水やたちまち白き蒸気なり
打水や柄杓一杯草木にも
木陰まで一歩は長し大暑かな
味噌汁はちよいと濃いめの大暑かな

樋口元美

舌だして見せあふ子らのかき氷
踊る阿呆チームそろひの藍浴衣
金魚玉の主亡くなりて今喪中
母傘寿嫁の贈りし白日傘
心のままに憩ふ緑陰けふ一日

東京　清水美千子

八十路まだ健脚なりし夕立雲
朝の空ビタミンカラーの花南瓜
伝へたきこと儘ならぬ落し文
とんぼうの群舞ふ空や子等の声
草刈れど草に負けたり草かぶれ

鬼石　榊原聰子

かまきりが首を傾げてこちらみる
白鷺二羽と程良き距離に川の縁
酷暑日の鴉の声に苛立ちぬ
かき氷時代の変化か味多彩
井戸端で西瓜を丸から切り分くる

藤沢　小島喜代子

かき氷食べぬるめの風呂に入ろうか
手に氷菓かけ足の子は私みたい
玻璃の底氷菓眩しき昼下がり
残りたる氷菓をすくふ銀の匙
涼を呼ぶ求肥白玉君となら

東京　中村まどか

鯛やにはかに翳る杉木立
朝顔の粋な一鉢團十郎
佞武多果つ送り太鼓の惜しむごと
振り向きて手を振る吾子や白木槿

さいたま　伊藤美津子

マウナケア青白きアーチ天の川
送電線入道雲を切り裂きて
ご先祖も一緒に食ぶる大西瓜
夕立や片袖冷たき晴雨傘

三浦玲子

空蟬や吾の生と死を重ね見る
日の盛り旅の楽しみ道の駅
空蟬や生死流転の定めあり
日盛や尺八の音に癒さるる

榎本道代

笹飾りドロップシールの星ひとつ
朝の雨両手に掬ふ梶の葉に
朝の雨冷たき手にや星今宵
天の川小舟に乗るや星の夜

草加　持永喜夫

薫風や朝の読経頭垂れ
ワールドカップ好機見逃す夏の未明
夕立や地面たたきて去りゆかむ
夕焼空明日への希望もえいでて

さいたま　三森恵子

ポン菓子に昭和の香り夏の宵
空蟬の使命終へなほ佇むや
西日を受くるご神木かな影深く
空蟬や甲冑のごと不動なり

浦川美佐子

雅子皇后光り輝くバルコニー
梅雨晴やフラワーシャワーで婚祝ふ
大小の膝並ぶ露台の足湯かな

田口文子

誤植訂正

二〇二六年十月号五八頁下段。慎んでお詫び致します。

正　寺内洋子○
誤　寺田洋子×

特集　路地裏の俳句
巻頭作品10句
山尾玉藻・渡井恵子・鳥居真里子
森岡正作・井上康明・星野高士
辻村麻乃・高柳克弘

俳壇
11月号
10月14日発売
定価1000円（税込）

巻頭エッセイ
堀切　実

八木健選　滑稽俳壇

四季巡詠33句［第V期］……今瀬一博・松岡隆子
リレー連載　没後50年の俳人たち〈高野素十〉…中本真人
新連載　大野林火ノートから……太田土男
連載　風の旋律……名村早智子
セピア写真館……松橋利雄
編集室の風景……ひろそ火俳句会
いま、気になる俳句の言葉…井上泰至
「名句DE動画」の世界……蜂谷一人
季語を考える……仁平　勝
二度目の俳句入門……長谷川　櫂
今月の句……梅檀俳句会
俳句と随想12か月　波戸岡　旭・吉田千嘉子

本阿弥書店　〒101-0064
東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル 電話03（3294）7068 振替00100-5-164430

作品鑑賞

山本鬼之介

ベランダにシーツ舞ふ黙日の盛　寺町知子

真夏の太陽がじりじりと照りつける昼下り。折からの風でベランダいっぱいに干したシーツがばたばたと音を立てて舞い上がっている。シーツが立てる音以外には、人声は勿論、犬や猫などのペットの声も、小鳥の鳴き声も聞こえない沈黙の世界である。「シーツ舞ふ黙」という簡潔な表現が、季語の効果を活かしている。

鉛筆を削る音止み秋隣　阿部幸代

肥後守を使って鉛筆を削っていた頃が懐かしく甦ってくる。鉛筆を差し込んでくるくる回す小さな鉛筆削りや、ハンドルを回して削る鉛筆削りなど、当時としては文明の利器がいろいろあったが、時代の流れの中で鉛筆がシャープペンシルに置き換わってきた。戦後暫く昭和の時代は、削る度に芯が折れてゆく粗悪な鉛筆が多く、鉛筆の使用が嫌になったこともあった。

しかし、シャープペンシル万能の現代であっても、根強い鉛筆愛好者がいて、作者もその一人ではないかと思う。今もって鉛筆を使っている人は、何本もの鉛筆を綺麗に削り揃えて筆立てに立て、使い始める前にその景色に満悦の眼差しを注ぐのである。鉛筆愛好者は、鉛筆の書き味と共に、肥後守で鉛筆を削る心のゆとりを愉しんでいるのだと思う。丁寧に鉛筆を削っている行為と「秋隣」の組合せが実によい。

着流しの涼しく立てり京都駅　石井直子

東京駅や大阪駅と同様にいつも混雑している京都駅である。作者が京都へ旅行した時にたまたま見掛けた人物の印象を詠んだ俳句と思える。その人が立っていた場所が、改札口なのか駅構内のコンコースなのか、それともプラットホームなのか定かではないが、作者の目にその人の姿が強く焼き付いたのであろう。

「着流し」の意味は、「羽織や袴を着けない男性の略装」であるから、江戸時代の武士が自宅に居る時や私的な用事で外出する時の格好で、鬼平役の中村吉右衛門の着流し姿がその代表的なものである。現今では浴衣を含めて羽織袴を着けない着流し姿が男性の和装の一般的な姿なので、あえて着流しと言わなくてよいのかもしれないが、この句に於いては不可欠な言葉なのである。

この人物から、一般人には無い特異なオーラを感じる筆者である。茶道の家元か日本舞踊の師匠、歌舞伎役者、或いは太秦撮影所の時代劇俳優など、普段から和装に慣れている人

ではなかろうか。辺りを席巻するほどの着流し姿である。

竹林のそよ風を呼ぶ夏座敷　反町　修

その家の敷地が竹林と接していて、庭に面した座敷に竹林を吹き抜けた涼しげな風が入ってくる。日本家屋ならばこその醍醐味を満喫できる部屋である。その部屋で、主と客が、その風を受けながら談笑している。

窓を打つ蛾の親しさよ夫ならむ　本橋稀香

これまでに、亡くなった人が昆虫などに化身して親しかった人に会いに来るという話を何度も聞いていたので、掲句を読んで然もありなんと納得した。締め切ってある窓にぶつかりながら何時までも羽撃いている蛾に、もしや夫なのではと思った瞬間、何時もは寒気立つほど毛嫌いしていた蛾に急に親しみを覚えたのである。とは言え、窓を開けて招き入れるほどの勇気は無く、暫く見詰めていたら、諦めたかのように飛び去っていった。心に響く俳句である。

神奈備にあまねく満つる秋の声　丸屋詠子

神の鎮座する山や森を意味する「神奈備」であるが、身近に接し得る場所としては神社の森であろうか。秋の某日、遠回りして氏神の神社の森を通った時、こんもりと茂った木々の葉擦れや虫や鳥の声など、総ての音が自分に語りかけているように思えたのである。

終バスを降り古里の夏の星　皆川更穂

久しぶりに故郷を訪ねた作者。最寄り駅から最終のバスに乗り、実家のある停留所に下りると、都会では観られぬ満天の星空が広がっていた。ただそれだけで心が満たされた。有りの儘の俳句ではあるが、それだからこそ読み手の心に届くのである。

佐渡の海足湯にひとり大夕焼　田中弘子

安直に温泉気分を味わえる足湯である。所は多くの観光客が訪れる佐渡島。日本海を見渡せる絶好の場所で足を癒やし、覆い被さってくるような壮大な夕焼けを眺めながら時の経つのも忘れている。ああ羨ましいの一語に尽きる。

軍神に負けるものかと早星　飯田忠男

所属する句会で、天文博士と呼ばれている作者の俳句であるから、掲句の「軍神」を「火星」又は「北斗七星」、早星を赤く輝く「アンタレス」と「アルクトゥールス」の何れかであろうと判断したが、それぞれを一つに絞り込むのに苦心した。結局、軍神を赤く妖しげな火星、早星を夏の夜空で最も赤く輝くアンタレスとしたが、さて如何なものであろうか。

軍神たる火星に向かって敢然と立ち昇ってゆく早星＝アンタレスの勇姿を描いた俳句であろうとの思いに到った。

打水や一番星が姿見せ　倉田星歩

近年、家の前で打水をしている光景に出会う機会が少なくなったが、なかなか情緒豊かな習慣の一つかと思う。いつもより少し遅れて水撒きをしていて、ふと空を見上げると一番星が輝いていた。宵の明星と言われる金星がぴったりであろう。単に打水だけだと日中の暑さの感が強いが、星が詠まれたことで、打水による涼の効果が倍増されるようだ。

「海坂」の城下もかくや蝉時雨　三浦真由美

藤澤周平の名作「蝉しぐれ」を小説で何度も読み返し、映画でも別々の主役が演じる「蝉しぐれ」を観て感動した。特に、海坂藩のモデルとなった山形県鶴岡市の庄内言葉で演じられた映画には感激した。

この俳句は、本句の作者が今年耳にした蝉時雨と小説の舞台である海坂藩の蝉時雨とを合致させて詠んだものであろうが、蝉時雨という季語を介して虚と実がものの見事に融合したことに賛辞を贈りたい。

グールドの呟くピアノ夜の秋　森下山菜

カナダの特異なピアニストとグールドの演奏曲をじっと聴いている作者の姿がありありと浮かんでくる。「呟くピアノ」が、その演奏の特徴を現しているのだと思うし、それを受け止めている「夜の秋」が的確である。

日の暮れを待てず花火を選る子かな　内田章子

昔に比べて今は、家庭で子供達を喜ばせる手花火の需要は減っているようだが、家庭団欒の手段の一つとして根強く残っているように感じる。往時我が家では、親が花火を扱う店に出向いて子供達が喜びそうで危険でないものを数種選んで買い求め、子供等には見せずに夜を待った。でも、子が花火を見つけ出して姉弟三人であだこうだと言い合いながら好みの花火の確保に余念がなかった。

この句が当時の様子を懐かしく再現してくれた。くるくる跳ね回るねずみ花火や庭を輝かせるナイアガラ花火、そして、フィナーレの五段飛び打上げ花火などが、数十年振りに還ってきたような気持になった。

折鶴に突風絡む終戦日　遠藤人美

神社に奉納されてある千羽鶴であろうか。千羽鶴は、日本の伝統的な風習で、長寿・健康・幸福・平和などを願う気持が籠められたものである。その千羽鶴に突然の強風とはまことに不穏であるし、ましてやその日が終戦日であったなら、災害の予兆と思っても過言では無かろう。しかし、それは筆者の思い過ごしであって、無事にその日が過ぎていったのだと思う。

初鮎の川面ひらりと艶姿　綿引まりこ

「初鮎」と言う言葉は、歳時記の本題と傍題、更に例句にも見当たらないので、作者の主観的な表現によるものと判断した。即ち筆者の解釈は、ある特定の人物がその川でその年に初めて目にした鮎と言うことであろう。食しての味は別物として、水面から跳ねた若鮎の優美な姿を、女性の「艶姿」と捉えたのがよかった。

打水や隣家先へも御裾分け　杉浦千祐

砂塵の立つのを抑えたり暑さを凌ぐために門前や庭に打水をするのが日本文化の一つとして定着していたが、住まいやそれに伴う生活様式が大きく変化してきた近年では、見ることが少なくなった。ましてや、ついでとは言え隣近所まで打水する行為は、滅多に見られない貴重な行いである。

気が付けば被災地に舞ふ蜻蛉かな　元田亮一

本年七月二十八日、平成二十八年と同じ熊本地区に大地震が発生し、またまた多大な災害をもたらした。その時の被災地の悲惨な状況を見舞うかのように蜻蛉が飛んでいた。なぜかほっとする一齣がこの俳句に描かれている。

立ちすくむ犬の三歩や日の盛　平野　楽

元気溌剌の愛犬も、近年の酷暑には気力を削がれ、飼い主が散歩に誘っても嫌がるようだ。まさにその状況を上手く表現している。「三歩」は「散歩」と同音であるから、リードを引っ張ってもやっと三足歩いてそれ以上は絶対進まないということで、即ち散歩拒否の行為なのである。

水遣りにしばし離るる雀かな　秋谷風舎

数日雨が降らず、乾ききった庭の水撒きに余念がない。雀が数羽やってきて餌を漁っていたが、飛び散る水に驚いて離れた処へ避難している。暫くして水遣りが終り、雀等にとって平穏な庭が戻ってきた。小林一茶の「雀の子…」の俳句が浮かんでくる。

ぴかぴかのアメ車現る日の盛　石関六弦

夏真っ盛りのしかも日差しが最も強い時間帯に、突如見るからにアメリカ産と分かる大型の車が街に現れ、居合わせた人々の目が一斉にその車に集中した。ぴっかぴかに磨かれたその車体に目が潰れそうである。さて、車中の人物や如何に。

打水に生気の戻る紺暖簾　室井早都子

料亭の入り口に掛けられている藍染めの暖簾であろう。玄関の打水の清々しさと紺暖簾との対称が実に佳い。

水琴窟

（水明集九月号鑑賞）

池田雅夫

暑中見舞「元気」とあつた妹の逝く　駒谷行雄

立秋前の土用の十八日間を暑中という。暑さの厳しい時期、夏負けしないように「暑中見舞」を交わすのである。それを書いたときの「妹」は「元気」だったのであろう。あるいは何かを患っていて、一時的に元気なことを知らせてくれた。その妹が無念にも逝ってしまった。哀しい追悼の句とした。

逆上がり得意顔なり柏餅　門真宏治

「逆上がり得意顔なり」と言い切っているところに惹かれた。主語にあたる誰かは表わされていないが、おそらく少年であろう。端午の節句には欠かせない「柏餅」であるから、元気な少年の姿が浮かぶ。歯切れのよいリズムがあたかも連続して逆上がりを行なっているように思えて楽しい。

とんがりをそつと確かめ笹粽　山中いちい

上方の粽に対して江戸の柏餅が一般的である。笹の葉をくるくる巻めて先端を尖らせるため、米がしっかりと詰まりにくい。そのためにでき上がり具合を確かめているのだ。小さいころは粽は格別であったが、現代の子供にははたして？

小さき手に小さき命の蛍かな　森下風湖

闇に点る蛍の光は古くから多くの詩歌文芸に詠まれてきた。女流の俳句には昆虫としてよりも、女性の生霊であるかのように華麗さと激しさが詠まれている。子供には蛍狩りなど楽しい夏の夜の遊びである。それらをみんな踏まえた上で「小さき手に小さき命の」と、可愛いらしく詠み上げている。

水湛へ宅地の中の代田かな　小川洋子

北陸地方の平野部では田んぼの中に家があり、いわゆる「散居村」と言われている。田打ちが済み、代掻きも終り、充分に水を張って田植えを待つばかりの「代田」。見た目には「代田の中の宅地」であろうが、ここは「代田かな」と、その存在を強調している。異常気象の昨今、豊作であれ！

主無き家の藤棚満開に　北出久美子

隣の家であろうか。昨年までは住人がいた隣家であるが、「主無き家」となった今年も豊かに垂れる花房の「藤棚」。荒れて草茫茫の空家となってもみごとに咲いている。「主無き家の藤棚」で一端切り、「満開に」として鑑賞した。

夏めくや木木の葉に葉に日ははねて　三森恵子

草木の緑が濃くなり、木の葉のそよぎや草花に、そして、人の装いにもどことなく夏らしい気配が漂ってくる。そんな心持ちを「夏めく」という。掲句の「木木の葉に葉に日ははねて」の言葉の重なりがリズムよく、「夏めく」に相応しい。

老鶯の声に鎮もる山上湖　大神満智子

夏の鶯は里を離れて山に入る。そのころは鳴き声も大きく、長く実にみごとである。ぐるりと空に囲まれた山頂。そこの「山上湖」に鶯の声がひびく。俗世間と対照的な自然の雄大さを詠んでいる。老鶯の澄んだ鳴き声に心があらわれる。

新緑の吐き出す息吹ツーリング　高山みどり

初夏の木木の緑には艶やかな美しさがある。新緑の風に吹かれながらの「ツーリング」。日常の気分転換にはうってつけである。「吐き出す息吹」に工夫の余地があるものの、その「新緑の息吹の中へツーリング」する爽快感が溢れている。

明易やキャリーケースの音高く　石井直子

「明易」と「短夜」は同義であるが、それを感じる人の心情によって使い分けられている。静かな早朝、「キャリーケースの音高く」に旅の期待と逸る気持ちが表われている。

初鰹空壜並べ熱き談　榎本道代

「初鰹」を目の前にして酌み交わす景が見える。土佐のいごっそうならば一升壜であろうが、昨今はビールが適例であろう。一昔前の時代にはこうした熱い漢がたくさんいて、人生を語り合ったものだが、現在も熱血漢はいるのであろう。

聳え立つ氷川の杜の樟若葉　菅原靖子

大宮の「氷川神社」はうっそうとした杜に囲まれている。樟は日本では最も巨大で長寿の樹木である。樹齢ン百年の巨樹の厳かな杜の鎮もりを「樟若葉」の独特な美しさで現わしている。「聳え立つ」の措辞にその歴史の重さを感じる。

青嵐三角屋根の風見鶏　持永喜夫

「風見鶏」は鶏を象った風向計をいう。多くは洋風の屋根の上に取り付けられている。風の強い日に、右へ左へと向きを変え忙しく動き、「青嵐」に適っている。「風見鶏」は比喩的に「日和見」の人を示すので滑稽さも感じられる。

新緑や幼き児等の髪光る　小島喜代子

「新緑」のやわらかい葉の艶やかさと「幼き児等の髪」に共通する「光」を取り合わせた感性に共感する。爽やかな新緑の広場で元気に走り回る児等の姿が見えるようだ。

俳誌望見

梅澤輝翠

「LOTUS」

№56　二〇二六年　四月
発行人　無時空　映
事務所　さいたま市中央区

二〇〇四年七月　志賀康、酒巻英一郎らにより創刊。俳句結社や教室にとらわれず、独自の自由な句作、表現を追求する現代俳句の同人誌

特別作品　絵具箱　古田嘉彦

楽譜から朝日、水盤溢れて小旅行
威嚇には清酒に沈めたオニヤンマ

楽譜を見てただけなのに一瞬にして光が差し込み、同時に水盤の水が溢れて外の世界へと飛び出していった。私。

二句目、ちょっと不気味ですが、誰かを驚かす為に作った少年の武器なんでしょうか。

やすらかにひらがなを捨て息の文字　表　健太郎

生まれて初めて知るやさしいひらがなさえ捨てて、呼吸するだけの生き物になる。穏やかな解放感やすらかにである。

屋根裏で生きるに慣れて偽日記　熊谷　陽一

表通りから離れ屋根裏部屋で、自分だけの空間にこもり嘘と真実の間を自由に生きる心地よさでしょうか。

こそあどのことばかくあれちからぐさ　酒巻英一郎

すべて平仮名声に出して唱えたくなる、こそあどの～ことばですが、どうぞこんな風に力強い力草で人に接したいのです。

残酷な星から飛べば雪　三上　泉

残酷な星はこの地球か、別の惑星か、どちらにしても残酷で辛い星、意を決して飛んでみたそこは雪であった。その雪はやさしく包んでくれたのか、やっとの思いで脱出したのにその世界も冷たい雪の世界であったのか。

特集　創刊同人でもありました
小野初江追悼号でもあります。

追悼　小野初江（追悼句）

片時雨あまおとたどりははのくに　丑丸　敬史
しなやかな背の進み行く花野かな　岡田　恵子
とおく降る花かもしれずうたいごえ　表　健太郎
静けさを鎮めしままに初花野　三枝　桂子

はなふるひ
ついに天にて
ゑまふひと　酒巻英一郎

見つからぬ刃はここにあり花野にて　古田　嘉彦
誘われて言の花降る淵を見る　無時空　映

降る花のような優しいお人柄の小野さんに誘われ、残された方々がその温かい言葉を受け継いでいかれる事でしょう。

山紫集

網野月を選

木槿咲く隣は町のサイクル店　岡田宣子
堀隔つ武家のませがき白木槿　菅原卓郎
花木槿男世帯の庭の隅　曲淵徹雄
姓ちがふ表札二枚白木槿　池田珪子
木槿散る泰然自若の吾が女房　湯浅和
ころころと替はる大臣花木槿　反町修

燃え残る火種抱へて花木槿　渋谷きいち
底紅を一輪添ふる京料理　石井直子
白木槿年金事務所の帰り道　元田亮一
節くれの祖母の手温し白木槿　松村笑風

――以上特選

腕白は木槿の萎むこと知らず　鈴木藻好
散散に散つてみたかろ花木槿　横山礼子
被災地の灼熱地獄花木槿　髙橋満耶子
閉めきりの雨戸の家の花木槿　武田重子
禅寺に木槿の花の乱れ咲き　田中章嘉
投句箱何か言ひたげ白木槿　田中弘子
木槿にも大和魂宿りをり　寺内洋子

白木槿産着のやうな柔らかさ　寺町知子
波音の聞こゆる生垣白木槿　飛永　鼓
山を越え古里へ続く木槿かな　南條きわゑ
大合唱の聞こえくる花木槿　西幅公子
お隣りの明かりちらちら花木槿　野口和子
秩父路の木槿の咲くや十万本　野村美子
白球を追ふ九回裏や白槿　畠中風花
茶会終へ長居は無用白木槿　畑宮栄子
今日一日励みなされと木槿垣　原田自然
代代の薬師（くすし）の庭や白槿　原田秀子
白木槿解体工事ファンの音　樋口元美
人は皆赤き血流れ花木槿　日高道を
花槿朝な夕なのごきげんよう　檜鼻ことは

余生とはけふの一日か白木槿　平野　楽
底紅や今朝も出会ひし老夫婦　福田千春
一日に一善の所為白木槿　保坂翔太
ながらへる母のひとひや白木槿　正木萬蝶
白木槿ふはり揺らして朝散歩　丸屋詠子
木槿垣紫煙くゆらす人隠し　三浦真由美
日日を違ふる余生紅木槿　皆川更穂
底紅や乙女の開花待つばかり　宮﨑チアキ
お屋敷の門より佳人白木槿　室井早都子
釜山にて路地の小窓の白木槿　持永喜夫
今日よりも若き日は無し木槿掃く　本橋稀香
犬小屋の表札「リク」や木槿咲く　森　和子
木槿は萎むマスカレードに日は暮れて　森下山菜

裏の家底紅高く数多咲く　森下美智枝
畑中に今を誇るや花木槿　山岸久美子
木槿垣母と娘とベツカフ飴　山下ユリ子
紅を差しけふのひとひを白木槿　山中いちい
一日をつつがなく終へ白木槿　横山君夫
白木槿命いただき大あくび　吉川拓真
木槿落つ東野圭吾早世す　綿引まりこ
明朗の裏に陰あり夕木槿　青木鶴城
勉学に定年はなし花木槿　秋谷風舎
住職の優しき法話白木槿　新　暦文
木槿咲き見送る橋や地蔵堂　阿部幸代
底紅や空家となりし友の家　荒井倶子
万策の尽きし夕闇金木犀　新井のり子

おちよぼ口真赤な紅の白槿　飯田忠男
心中を読まれてゐたり花木槿　池田雅夫
宅配の車そろりと木槿垣　石川理恵
咲きそむる木槿をたたく朝嵐　石黒由美子
お点前に三日月の泡花木槿　石関六弦
白木槿爺のまんぢゆう完売す　石田慶子
皇子眠る二上山や白木槿　伊藤美津子
紅底やほのかに紅のくすり指　梅澤輝翠
おひさまに透けてポジャギと花木槿　遠藤人美
来客を迎ふ木槿や淡き色　川島夕峰
病窓より日ごと数ふや白木槿　木谷葉子
目印のあの角の家木槿咲く　木村小麦
木槿咲く見上ぐる空に飛行機雲　倉田星歩

坂の上さらに上向く花木槿　河野はるみ

茶筅持つ指のマニキュア白木槿　小林京子

純白のドレス眩しや花木槿　笹本啓子

祖父植ゑし木槿は庭の王座なり　嶋田洋子

底紅や我もひと日の紅をさす　清水桂子

夕陽まだ屋根の真上に木槿垣　下川光子

今生の一と日の床し花木槿　霜多光代

藍おびて夕の風には木槿散り　菅原真理

白木槿廃居の庭の片隅に　菅原靖子

白木槿久しく雨戸開かぬ家　杉浦千祜

黄色き壁にささめくごとく木槿咲く　鈴木玲子

床の間の木槿一輪茶一碗　関谷多美子

「アリラン」を歌ふチョゴリよ白木槿　染谷風子

令和９年　新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。

新人登龍門の趣旨をよく理解されて多数のご応募をお待ちしています。

応募資格　季音同人を除く同人・誌友

応 募 句　未発表作品：15 句（表題を付す）

水明集・句会報等「水明」誌及び外部に発表した作品は不可

締　　切　令和９年２月 15 日（発行所必着）

応募方法　**令和９年水明１月号に応募用紙添付**

選考は、新珠賞選考委員会に於て受賞者を決定いたします。
尚、誌上には受賞者の作品のみを発表します。

山紫集作品評

網野月を

木槿咲く隣は町のサイクル店　岡田宣子

現代俳句の最たるものであろう。日常を活写して揺るぎない。「サイクル店」に木槿を配したところは、実景なのかも知れないが、想望の俳句であっても構わないかと考える。俳句で表現するところの濃淡が行き届いている。

堀隔つ武家のませがき白木槿　菅原卓郎

「堀隔つ武家のませがき」越しに「白木槿」が見えるというのである。白色だけに目立つのである。「武家のませがき」と似合っているのか、不釣り合いなのか、解釈に迷うところであるが、それは既成概念の把握であって、作者の美意識に、この光景は何とも美しいと映ったのである。「白」の象徴性を遺憾なく引き出している。

花木槿男世帯の庭の隅　曲淵徹雄

「花木槿」の句としては一風変わった句意であろうか。「花木槿」と「男世帯」という、その取合せのマッチングに緊張感を作り出している一方で、少々滑稽さと言うか、諧謔味も加味されている。この辺りが作者の真骨頂であり、何やら作句を愉しんでいる作者が想像できて、この句を読ませて頂く幸せを感じてしまう。

姓ちがふ表札二枚白木槿　池田珪子

東アジアの諸国、隣国などでは婚姻の際に姓を一緒にすることはない。夫婦別姓なのである。ただこの句はそうした隣国のことではなくて、日本の昨今のいわゆる二世帯住宅の在り様を表現しているように解釈できる。「表札二枚」はよく見かける景である。

木槿散る泰然自若の吾が女房　湯浅和

座五の「吾が女房」は花の命の長短を熟知しているのであり、今更慌てることはないという態度なのであろう。それよりも全ての在り様を将に「泰然自若」として受け容れようとしているというのである。人間界も自然界もすべてを肯定することで、平穏に過ごし得る「吾が女房」の大きさを描出している。

ころころと替はる大臣花木槿　反町修

日本のことでもあり隣国のことでもあろう。いや世界中で為政者はトカゲの尻尾を簡単に切ってしまう。「花木槿」のいわゆる「一日の栄」の言葉に匹敵している。座五の季語「花木槿」のイメージに作者はそうした不条理と身勝手さ、そして非情な匂いを感じ取ったのではあるまいか。取り合わせの句として、座五の季語と上五中七の句意の距離感を感じる読者もあるかも知れないが、この距離感は絶妙である。

燃え残る火種抱へて花木槿　渋谷きいち

この句の解釈は、読者に委ねられているところの多い句であろう。世間のこととも解釈できるし、世界的な政治の世界を想定することも出来る。また極個人的な出来事を踏まえての事柄という可能性もある。歳時記にある例句には個人的な内容の作例が多いようである。「花木槿」の本意は、むしろその辺りにあるようであるから、個人的な出来事に還元して鑑賞することが良いかと思われる。が具体的にはやはり読者に委ねられていると言ってよいであろう。

底紅を一輪添ふる京料理　石井直子

「底紅を一輪添」えるあしらいは中々に難しいものであろう。昼餐か夕餐かは不明だが、実に見事な料理人の技のように思われる。例えば上五を「…や」切れにする方法もあるのであろうが、そうはしないで、一句仕立てにまとめ座五の「京料理」にフォーカスして、季語の存在を脇役にしている。

白木槿年金事務所の帰り道　元田亮一

中七座五の句意は筆者にとっては初見である。俳句にすると些か生々しい感もあるのであるが、それだけに新味を感じるのである。この句の場合上五の「白木槿」をどう解釈すれば良いのであろうか。「帰り道」に「白木槿」に出会ってほっとした、癒されたと解釈できる。が「白木槿」の存在に自分自身の年齢や立場を客観的に省みて少しばかり寂しさを覚えたとも解釈できる。むしろ何か一つの感情を「白木槿」に集約しているということではなくて、いくつかの感傷が未整理の状態で存在しているということなのではないだろうか。今年の初夏、筆者も年金事務所へ通ったので、大いに共感している。その際は白い立葵であったが。

節くれの祖母の手温し白木槿　松村笑風

座五の季語「白木槿」が奏功している表現である。「白木槿」をみると「節くれの祖母の手」の温みを思い出すというのである。作者の心の奥底に大切にしまってある「祖母」への追憶が伝わってくる。人間の五感に残る記憶の素晴らしさを具体的なものに擬えている。

腕白は木槿の萎むこと知らず　鈴木藻好

中七座五の句意は木槿の花のあわれを知らない、ということである。では上五の「腕白」は何をシンボライズしているのであろうか。精気漲る若者を象徴しているように筆者には思えるのである。哀れを知らないことをネガティヴに捉えているのではなく、作者はむしろ羨んでいるようである。散文的な句に否定を加えて、巧みな表現に仕上げている。

散散に散つてみたかろ花木槿　横山礼子

木槿の花はバラバラに散らずに花の総体がポトリと落ちる。その様態を指して作者は「散つてみたかろ」というのである。椿の花と山茶花の花の対比に似ている。とすれば木槿の花に対して散ってみせるのは何の花であろうか。ボタンは崩れるように、芙蓉は木槿に似てポトリと落ちる。とすれば桜に比しているのであろうか。花が散ることへの美学が作者にはおありなのであろう。中七の木槿の花へ話しかける措辞がこの句に生命を吹き込んでいる。

日高道を　選

鼓笛集

白桃を剥く手は時に母を引く　木谷葉子

俳諧味の溢れる句になりました。

日常の事柄（「桃を剥く手」と「母を引く手」）の関係性を「時に」という措辞で繋げることで、ややパラドックスに置き換えたところが成功していると思います。

山城の狭間ぬく風や秋近し　石黒由美子

「狭間ぬく風」の措辞が素晴らしいと思いました。

何処の山城かは読者の想像にゆだねていますが、「秋近し」の季語と響き合って佳句となっていると思います。

洋上の台風にある目のすがし　寺町知子

まだ日本から離れた洋上にあり、気象情報の衛星画像で見る「台風の目」を「すがし」と詠まれた作者の感性に脱帽です。

いづれ日本に近づくにつれ、その目は大きくなり、災害が心配でそんなことは言ってられなくなりますが、まだ今日は「すがし」なのです。

天高し木曽御嶽に禅の風　畠中風花

今から十二年前の九月二十七日、それこそ「天高し」の季語がぴったりの晴天の日に突然噴火した木曽御嶽山。五十八名の命が突然奪われ、五名の方が未だ発見されない大災害。座五の「禅の風」に作者の気持ちが表れています。

耐へる人祈る人在り酷暑の日　山中いちい

今年から制定された「酷暑日」、俳句の世界では既に季語としても先行して使われていました。

「耐へる人」と「祈る人」のリフレインが良く効いていると思います。

――以上特選

以降は各句をひと口鑑賞します。（到着順）

事件もの好きな妻なり夏の午後　門真宏治

昼ドラ好きの奥方、よくある景ですね。「なり」で切らずに「ゐる」ぐらいでどうでしょうか？

考と妣の真ん中に寝る盆の家　森下山菜

ママです。「真ん中に寝る」の措辞に作者の亡くなられたご両親に対する想いが伝わります。

京訛りもとめ道問ふ古都の秋　寺内洋子

ママです。古都の町を歩く作者の一瞬を詠まれました。

ねえ今度いつ会へるのよ素数蝉　石関六弦

作者の意図はよくわかりますが「素数蝉」は生物学的に厳格な意味を持つ言葉ですので要検討です。

悪童らお化け屋敷てふ夏館　本橋稀香

ママです。大勢のお孫さんに囲まれて、大忙しのおばあさん、特に夏休みは大変ですね。

うれしさに打水空へ思ひきり　杉浦千祐

ママです。勢いのある句です。「思ひきり」が良いですね。

名人戦駒音高き夏座敷　反町　修

ママです。格調の高い写生句となりました。

遠花火物理の理実感す　田中弘子

作意は十分にわかるのですが、中七の「物理の理」に推敲の余地を感じます。例えば「遠花火遅れて届く音を待つ」

亡き伯父の畑は花野となりにけり　三浦真由美

亡き伯父様との思い出のある畑なのでしょう。俳句では例えば「伝説の畑は花野となりにけり」とドラマ化も。

ちちろ鳴く明日は何処の山行かん　山下ユリ子

ママです。山行のお好きな作者、山小屋で虫の音に微睡みながら明日のルートを思い描かれている景でしょうか？

終戦のあの日の空も碧き空　元田亮一

「終戦のあの日の」だと無季とされる恐れがあるので「終戦日あの日の」と一旦切った方が良いかも知れません。

センサーの反応鈍る猛暑かな　飯田忠男

色々なセンサーがありますね。例えば「蛍光灯の反応鈍る」では？　尤も蛍光灯は元々反応が鈍いですが。

人ごみに揉まれつ祇園会の逢瀬　嶋田洋子

ママです。粋でお洒落な句ですね。作者の若かりし頃の夏の京都の思い出が蘇っている様子が良く表れています。

地に落ちてなほ足動く秋の蟬　平野楽

「なほ足動く」は客観写生でその通りなのですが、少し詩的に例えば「秋蟬の地に落ちてなほ生きんとす」では？

風鈴の町を機影の低く過ぎ行けり　石井直子

「風鈴の街」「機影の低く」と云えば川崎大師ですね？少し字余りなので「風鈴の町を機影の低く行き」では。

岳人の行く手阻むや雲の峰　倉田星歩

「岳人」というとかなりの上級者でしょうか？「行く手を阻む」と繋げてみてもよいかもしれません。

独りきり万座露天の星月夜　木村小麦

作者は「独りきり」を強調されています。場合によっては「星月夜万座露天を独り占め」と語順を変えても。

枝豆や作業つなぎの土まみれ　遠藤人美

ママです。収穫の秋ですね。家庭菜園での収穫風景か。

後の世に念ひめぐらす流灯会　丸屋詠子

ママです。灯籠流しの灯を眺めながら作者は後の世に思いを巡らせている。「念ひ」の文字に作者の思いが。

「大吉」を当てて八十路へ秋近し　阿部幸代

ママです。「大吉」を引き当てられた作者、これから迎えられる八十歳代への前向きな思いが十分に出ています。

其処此処の瓦礫に悲鳴原爆忌　秋谷風舎

ママです。この句は「悲鳴」につきます。作者の悲鳴でもあり、当時の被爆者の悲鳴でもあります。

負け馬の濡れた瞳に夏の雲　綿引まりこ

ママです。負け馬に焦点を当てた作者の視点が良いです。「夏の雲」で敗戦といえども全力で戦った清々しさ。

玉の汗空調服の唸る音　樋口元美

ママです。この夏はよく「空調服」を見かけました。「空調服」某企業の特許の為か広辞苑に載っていません。

母の墓骸に響く法師蟬　鈴木藻好

「骸」だと故人の遺骨ですが、ここは作者に響くようにしてはどうでしょうか？「脳裏を揺する」などでは。

死にきれず蚯蚓は敵を待つてゐる　吉川拓真

ママです。「死にきれず」と心残りなのは作者、その気持ちを蚯蚓に投映していると読みました。しからば「敵」とは。読者の想像に任されています。

腹据ゑて伜武多の太鼓どんと打つ　伊藤美津子

ママです。「どんと打つ」に作者の思いが込められています。実景は伜武多の太鼓の音が作者に響いているのでしょう。

涙腺のありて涙の落つる秋　皆川更穂

良い句だと思いますが筆者は「ありて」が気になりました。「涙腺やなぜか涙の落つる秋」だとどうでしょうか?

鐘の音や願ふ万人原爆忌　武田重子

ママです。記念式典でつかれる鐘の音は心に響きます。

ベランダのルリマツリ揺れ梅雨明くる　菅原靖子

ルリマツリは花の時期が長いのか季語になっていません。「ベランダ」も夏の季語なので「庭先の」ぐらいでは。

初嵐足漕ぎスワン岸に揺る　室井早都子

ママです。情景が良くとらえられています。

思ひ出幾多処暑の銀座の夕明り　関谷多美子

ママです。素敵な思い出がおありなのでしょう。「銀座の夕明り」の措辞が処暑の季語にマッチしています。

盆踊り疲れを忘る七十路かな　川島夕峰

字余りですので「七十路や疲れ忘れて盆踊り」では如何。

無花果やひび割れ指に甘き汁　持永喜夫

「甘き汁」がやや分かりにくかったので次のようにしてみましたが、「無花果や摘まむ指先のひび割れ」では。

稲妻や下りれぬままの妻の役　松村笑風

恐らく妻の仕事は少々のことではやめることが出来ないと云う事だとすると「稲妻や夫の役より妻の役」などでは。

恋心そつと後押し今日の月　新井のり子

原句ですと主語と述語がはっきりしません。例えば「名月に背中押されて恋のみち」ぐらいでは如何でしょうか?

八月号訂正

皆川更穂さんの句の鑑賞で原句「いつの間に」を「いつの間にか」が正しいと鑑賞しましたが、両方とも正しい用法と分かりましたのでお詫びして訂正いたします。



連日の雨で天気が心配されましたが、快晴とはいかないまでも傘の要らない天候となった、九月二十七日（日曜日）に長谷川かな女師を修して第五十八回の「りんどう忌」が浦和コミュニティーにて開催されました。

当日の参加者は三十七名。会場にはお花とかな女師の微笑んだ写真の他お酒、お菓子、かな女全集等が飾られました。

司会の小林京子氏の開会挨拶の後、師への黙祷を捧げ、山本鬼之介主宰の挨拶を頂き句会へと移りました。（投句総数七十四句、互選は五句選、季音「雪」作家は十句選）

長寿のお祝い

米寿を迎えられた石井喜恵、石山かつ子、菊池ひろこ、清水桂子、山岸久美子、喜寿の青木鶴城の各氏に主宰より夫々の名前の文字が詠み込まれた俳句の色紙と色紙掛けが贈られ、皆様よりの賛辞と拍手に包まれました。

サプライズで、米寿を迎えられた山本主宰へ参加者のサインが寄せ書きされた大扇が贈呈されました。

聞こえくる歓**喜**の歌が**恵**方より　鬼之介
鹿の**子**着て**かつ**ての町を菊日和　〃
すゑ**ひろ**を開き金風入れ**こ**みぬ　〃
子宝の一声ひびく**桂**月　〃
いとし**子**の**美**名の響き永**久**なれや　〃
鶴をよぶ千年杉や**城**下町　〃

披講
主宰詠

鱗雲いま若州に紀州にも
洋服姿想へば愉しかな女の忌

日高道を・菅原卓郎



長寿の方々

主宰選

天　水軍を生みし潮流鰯雲　マスミ
地　今更の出世地蔵や鱗雲　延昭
人　地果てて始まる海よ鰯雲　昇

――天・地・人（色紙授与）

殿は遠き山嶺いわし雲　由紀子
鰯雲はてなき旅を行くごとし　かつ子
実朝の海一面の鰯雲　順子
目印は岬の風車鰯雲　和子
紫に暮るる山の端鱗雲　佐江
凛として楚楚たる草やりんどう忌　風舎
生まるるも逝くのも独り鰯雲　風子

――以上超特選（短冊授与）

帆船の揺らぐ航跡鰯雲　喜恵
石蹴りの石は置き去り鰯雲　〃
東雲の風は綾織りかな女の忌　真理
別所沼に学びし縁りんどう忌　桂子
ＡＩに詠めぬ一句をかな女の忌　栄子
吹き抜けの空切り取るや鰯雲　更穂
母の背思ひ新たにりんどう忌　はるみ
滑走路の離陸待つ列鰯雲　宣子
鰯雲つひぞ上がれぬ尻上がり　徹平
百歳へ紫紺咲き継ぐかな女の忌　章子
墓石は「楽」と刻めり鰯雲　久美子
馬乳酒を交はす草原いわし雲　卓郎
句心は老いても褪せず鰯雲　昇
鰯雲考に問ひたき事のあり　京子
喜寿米寿次は白寿ぞりんどう忌　道を
「烋」の字の今も不思議やかな女の忌　かつ子
凛たるを重ぬる齢竜胆忌　鶴城

――以上特選

詠ひ継ぐポエム百年りんどう忌　久美子
かな女忌の竜胆の色とこしなへ　順子
髷なほす合せ鏡やかな女の忌　卓郎
りんだう忌誌名に凛と師の墨気　佐江
人避けて大海目指すいわし雲　風舎
さきたまの空を充たして鰯雲　道を
寝ころんだら眼鏡いつぱい鰯雲　六弦
集まりて大群と化け鰯雲　邦人
かな女忌や仰ぐ俳句の道標　楽
牟良佐伎と万葉仮名でりんどう忌　風子
七色の虹はうすれてりんどう忌　ひろこ
「烋の天地」の豊けき光かな女の忌　マスミ
子のむすび頬ばりながら鰯雲　真理
ぷちぷちをつぶす幼やりんどう忌　桂子
付箋ある「牟良佐伎」を読むりんどう忌　ひさの
りんどう忌書棚に今もサザエさん　和子
海越しに望む霊峰鱗雲　徹雄
黄金色に輝く大地鰯雲　栄子
一湾に空いつぱいの鰯雲　公子
里村に竜胆捜すかな女の忌　茂子
かな女忌や句碑に日あたる別所沼　更穂
翼ごとひかうき飲み込む鰯雲　はるみ
高齢化の団地をおほふ鰯雲　宣子
夫家を亡くせど烽火りんどう忌　徹平
連衆の盛る集ひや鰯雲　章子
暗雲を笑顔で払ふりんどう忌　チアキ
かな女忌の鍼力の玩具発条で飛ぶ　延昭
嗜みの凄みへ迫るかな女の忌　京子
鰯雲芝生に臥せば過ぎしこと　修
むらさきの全集重きかな女の忌　輝翠
湧水の音の清らにかな女の忌　由紀子
雨は静かに藍を深むるりんどう忌　稀香
ひたひたと昭和の悪夢鰯雲　鶴城

高得点者の発表と賞品授与

一位　内田章子　二位　日高道を
三位　石井喜恵　四位　大場順子
五位　染谷風子　六位　五明　昇
七位　梅澤輝翠　八位　近藤徹平

主宰より講評を頂いた後、青木鶴城事業部長の閉会の辞を以って無事終了しました。受賞の皆様おめでとうございました。

会場の予約抽選の都合で開催場所や開催時間が大会ごとにまちまちで皆様にご迷惑をおかけしていますが、諸事情をご理解の程宜しくお願いいたします。

かな女句碑清掃の記

青木鶴城

九月十四日、常任運営幹事会開催の前に、定例となった別所沼公園と調神社のかな女句碑の清掃を実施しました。雨天が続く中当日はすっきりと晴れ、少し汗ばむ天候ではありました。

別所沼は網野副主宰、小林京子、青木鶴城、調神社は山本主宰、石井喜恵、日髙道を、菅原卓郎の二手に分かれ、蚊に食われながら句碑を拭き上げ、句碑の回りを清掃致しました。

一昨年には薄れていた碑文の塗装(色入れ)を実施したので、碑文はまだはっきりとしていて安心の状況でありました。

近くへお越しの際は是非奇麗になった句碑を訪れてみてください。

別所沼公園
曼殊沙華あつまり丘をうかせけり
かな女



調神社
生涯の影ある烋の天地かな
かな女



水明例会

第一例会（浦和）

菅原卓郎報
小林京子

大和路の光まとふて稲の花　マスミ
思惟仏の恩愛杳と紅葉月　〃
生家には恩賜の煙草菊日和　亮一
夕さればいよよはかなし稲の花　由紀子
歌心あれば見えくる早稲の花　順子
山峡の里に天恩菊花展　卓郎
吊り橋は身の幅ほどや稲の花　喜恵
——以上特選
稲の花なかなか来ない村のバス　節代
稲の花百姓信心深きもの　延昭
ここまで届く下校のチャイム稲の花　和子
逆さ富士湖の静寂や稲の花　喜恵
薄紅葉着せてはならぬ人に恩　和葉
しづかなる祖母の恩愛そばの花　由紀子
稲の花海をはるかに千枚田　マスミ
秋日和父母の恩夫の恩　順子
ＳＬの汽笛一声稲の花　徹平
けふ掌に句集繙く稲の花　はるみ
低く垂るる空渾身の稲の花　チアキ
広縁に姥のうたた寝稲の花　卓郎
一望に吹き渡る風稲の花　京子

第四例会（浦和）

石井喜恵
反町修報

落鮎や投網一閃山迫る　マスミ
秋風や水底に声壇の浦　〃
身の透くるまで吹かれたし秋の風　由紀子
舌長きトーテムポール秋の風　恵子
秋風や街を離るる旅一座　修
秋風にわが身を透かす竜飛崎　昇
秋風のついてくるなり化粧坂　喜恵
——以上特選
落鮎の跳ねて見ゆる都の灯　延昭
清流を渡る秋風沈下橋　暦文
東雲の後架の窓を秋の風　修
秋風や飛騨の湯宿の朴葉味噌　昇
秋風や心の糸を結びたし　翔太
秋風に追い抜かれたる徒競争　克己
秋の風朱印掠れし蔵書印　マスミ
秋風に雲たなびきて月の影　行雄
若鮎は膳の真中よ飛騨の宿　章子
落鮎のけむり河原を香らせり　由紀子
秋の風透明色の塗り重ね　恵子
鮎落ちて残る瀬の音風の音　喜恵



第五例会（浦和）

河野はるみ
岡田宣子　報

盆灯籠点して夫へ独り言　章子
種はじく指の記憶や鳳仙花　〃
石蹴りの路地がふる里鳳仙花　〃
爪紅の弾じける前の胸騒ぎ　知子
鳳仙花そちこちはぜる散歩道　はるみ
仏壇のちさき灯籠きよう色　〃
——以上特選
つまくれなゐは女の一生染め始む　千祐
燈籠に照らされ浮かぶ御神木　知子
鳳仙花彼の日を語るあねいもと　章子
盆灯籠供ふる母の丸き背　宣子
盆灯籠奥の院まで六十余　はるみ

若松例会（京橋）

正木萬蝶
石田慶子　報

寂庵参り胸に一輪曼珠沙華　邦人
ここからは結界畦の彼岸花　千春
廃屋に積もる光陰彼岸花　マスミ
野仏の一輪いだく彼岸花　はるみ
秋の湖オール跳ね上げ艇滑る　鶴城
酒蔵の黒塀囲む彼岸花　慶子
曼珠沙華ひとひ君へと戻る旅　萬蝶
——以上特選
秀山祭跳ねて酒屋へ風祭　月を
曼珠沙華死の商人の密かなり　京子
曼珠沙華其処此処火の手一揆の地　佐江
彼岸花思ひ出の顔みな笑顔　千祐
彼岸花皆息災と墓に告ぐ　稀香
心地よき尼僧の法話まんじゆしやげ　詠子
彼岸花落武者のごと寄り添ひて　星歩
彼岸花鴨居の五ケ条家庭訓　鶴城
曼珠沙華降りみ降らずみ鯖街道　マスミ
土葬の列に連なりし日や彼岸花　千春
咲き乱れ咲きそこねたり曼珠沙華　邦人
御影石なる花器ありや彼岸花　ひろこ
一族の墓はなやぎて曼珠沙華　慶子
曼珠沙華蕊を開きて扇塚　はるみ
口寄せが呪文を吐けば曼珠沙華　萬蝶

関西例会（大阪）

森本早苗　報

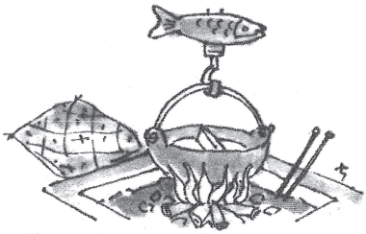
勤行の鉦の音色や秋初め　満耶子
秋初め渡り廊下に水かげろふ　千世子
程遠き則天去私や敬老日　洋子
残暑光敗戦エースに貰ひ泣き　早苗
——以上特選
神の手に委ぬる手術秋気澄む　和子
秋茜乳児の指につと止まり　嶋田洋子
拾ひ来しどんぐり数多いかにせむ　洋子
椰子の並木をイソヒヨ鳥や秋晴るる　千世子
許すまじ義援金詐欺秋はじめ　ノルン
小窓より風に乗り来し秋の声　満耶子
団栗の未だ青くさき香を放ち　人美
旅の子はいまどの辺り初紅葉　千枝子
秋桜成長早き乙女かな　きわゑ
ラ・フランス好きな子の子は適齢期　早苗

☆

☆

輪唱となる一山の法師蝉　和子
手力男待ちわぶ秋の出水あと　〃
梨を剥く夜雨はひどくなるばかり　人美

各地句会



若枝句会（浦和）

霧晴れて群青の峰せまりくる　美佐子
獏と知る二十歳の卓や天ぷら屋　泰生
結末を先に読む癖夜半の秋　貞代

櫟の会（浦和）

赤まんま明日も会ふけどさやうなら　あつ子
赤まんま手に疎開話の祖母とゐて　朋子
道祖神の足を撫る赤のまま　富子
秋めくやフルーツ売場艶めきて　文子
ウォーキング秋めく葉ずれ聞きながら　千重子

皐月の会（浦和）

米栂の森の秘湯でやる新酒　山菜
祇王寺の月光淡しみだれ萩　光代
温むれば深き香りの峡の酒　珪子
群青の秘境の崖に谷紅葉　暦文
週末の夜行バス着く大花野　きいち
静謐や古刹の森のこぼれ萩　更穂

雛の会（浦和）

休日のとろりと昼の無花果煮　輝翠
白壁を照らす月光蔵の街　チアキ
月に浮かぶ「月の沙漠」を口遊む　公子
椅子一つあけて誰待つ月今宵　喜恵
晩鐘に呼応するかに雁の声　桂子
道草のだちんに青き四日月　はるみ
紫に暮れゆく湖にかりがね来　佐江

櫻蔭句会（浦和）

遊覧の海は白波処暑の風　久美子
開け放し風遊ばする処暑の部屋　公子
処暑の日や幸水八個届きたる　行雄
芋の葉の玉を転がす処暑の風　玲子
久遠寺の大鐘響く秋夕焼　美子
雨戸繰る欹てて聞く処暑の雨　茂子
吹き出しの「やれやれ」波平さんの処暑　由紀子
久しぶり上野の山へ秋の展　千恵
彩玉梨を買ひ求めたる久喜の町　美智枝
処暑の雨とぎれとぎれに子の寝息　真理
命とふ恵みは久遠大銀河　多美子
処暑にたつ梵字一文字阿弥陀仏　幸代

繭の会（浦和）

炊き上る人生初の零余子飯　小麦
天の川離るる夫へ相聞歌　まりこ
銀漢や独り見送るエアポート　風子
静なる臓器労る白露かな　夕峰
天の川窓辺の手紙読み返し　ひさお
ひかれゆく牛の目静か秋湿　和子
車燈ゆく先の果てなる天の川　さよ子
栗鼠のごと子は頬張るや零余子飯　伸子
竹皮に隠して喰らふ零余子飯　月を
水澄むや恋の静女の白拍子　京子
双眸を閉ぢても残る天の川　風舎

秋明句会（浦和）

秋水や威風堂堂逆さ富士　道子
朝顔に独り言ちたる日曜日　知恵子
秋水に色付き一葉（ひとは）散りにけり　葉子
果敢にも朝顔は行く二階へと　京子
敬老の日もうすぐそつち骨密度　あけみ
水底の透けるこもり沼秋の水　卓郎
敬老日国旗踏んだりしないから　鶴城
秋の水まづは一杓妣と夫に　はるみ
祝つたり祝はれたりの敬老日　月を
秋の水日日近くなる池の底　道を

りんどう俳句会（浦和）

台風や音の荒ぶる駅ピアノ　君夫
絵蠟燭灯し寄り合ふ台風下　順子
二太郎を望む一姫天高し　翔太
鳥兜ひときは目立つ濃紫　夕峰
台風裡抱き合ふままの道祖神　徹雄
台風来時計回りに溶く卵　まりこ
台風に二十四骨の傘開く　寿夫
バッカスは終生の友兜花　風子
水脈曳いて秋澄む沖に潜望鏡　卓郎

ミモザの会（横浜）

露葎チャタレー夫人の庭師めく　萬蝶
露の世や歪を丸く許しけり　玲子
露の世や人間界と自然界　美千子
こほろぎの憩ふ庭下駄そのままに　詠子
透明なマニキュアを塗る露の夜　史代
朝露に濡れて子猫のしたり顔　慶子
乱れ咲く名も知らぬ草露時雨　千春

野ばらの会（浦和）

手話辞書を小脇に旅へ秋の空　夏江
石に書く写経の一字秋の晴　栄子
秋の晴肩怒らせて仁王像　茂子
半眼の白衣観音秋の晴　秀子
里芋の手料理甘き愛染むる　みき子

コクーンシティカルチャー俳句教室（さいたま新都心）

舟唄や新涼運ぶ最上川　昇
土用波帰還かなはぬ父の骨　倶子
夏逝くと揺らすグラスの鼻濁音　佐都子
結ひ上げてまぶし少女の秋祭　洋子
夏の果浮標の残る浜伝ひ　由美子

俳句の手ほどき（岩槻）

降臨の逆鉾祀る秋の峰　延昭
降嫁の宮を偲ぶ宿りや虫の声　佐江
街残暑突如線状降水帯　徹平
茶室への葉擦れ嫋やか竹の春　翔太
竹の春俳句の神よ降り賜へ　忠男
人声にゆさりふくらむ竹の春　幸代
修善寺の古民家カフェ竹の春　美子
老いの夢あまた降るごと星月夜　桂子
すくすくと育ちの良さや竹の春　久美子
「地野菜」の幟はためく竹の春　知子
頻き降るや五山の燈に月の雨　卓郎
天つ風総身に受け竹の春　チアキ
秋霖の降り残したる水源地　更穂
理容師に若き跡継ぎ竹の春　かつ子

あゆみの会（浦和）

祈る事多き八月早や二十日　啓子
バス待ちの顔げんなりと残暑かな　和
残暑空一球を追ふ決勝戦　靖子
残暑なほ弛びしままの脳の箍　倶子
秋暑し木立のもとに風を待つ　重子
辣油振る担担麺や残暑なほ　藻好

りそな俳句会（浦和）

あぜ道に火の粉を散らし彼岸花　勲
地震などに負けぬと肥後の彼岸花　建治郎
新米や炊き上がり待つ手にしやもじ　久美子
炊立ての新米ありて恙なし　道を
通り名の謂れあやふや彼岸花　雅夫

芽吹句会（浦和）

猛残暑地球の何処か壊れしか　富子
秋団扇間遠に使ひ母子旅　チアキ
秋扇模様違ひを洋室に　ひろこ
長羽織初秋風に浮き上がり　おにこ
秋暑し雑念浮かぶ座禅堂　修
新涼や声忍ばせる長ベンチ　弘子
吹きぬくる風に湿り気残暑かな　久美子
ひと夏の疲れも共に秋扇　道を

珊瑚の会（浦和）

処暑の風机上の「平家」捲りゆく　マスミ
藍染めのシャツの着心地処暑の風　昇
点描画の筆の大小色鳥来　恵子
箸さばき自在に処暑の若狭宿　史代
色鳥の羽根を拾ひし杜の中　広子
養生の芝につぎつぎ色鳥来　和子
このあたり昔花街色鳥来　かつ子
稜線はなだらかにして処暑の雲　喜恵
色鳥来蔵に秘蔵の鎖鎌　節代

鶴川山百合句会（鶴川）

目眩して宿痾をおもふ野分かな　月を
台風の目が逸れてより点眼す　史代
木の家に木を打ちつけて台風圏　広子
思ひ出すボードゲームを台風来　由美子
遅遅と進む時計の針や夜の台風　千春
台風過夕日に叫ぶ「バカヤロー」　萬蝶
台風を追ふやうに旅始めけり　理恵
青空へうらみ一言颱風禍　美千子
台風に津軽三味線掻き消され　うさぎ
イレギュラーリズム読めない台風とミサイル　まどか
あれやこれやと備へ台風じつと待つ　玲子

きざきサークル（浦和）

天耕の新蕎麦を打つ峠茶屋　昇
落人の裔住む里や走り蕎麦　倶子
新蕎麦や魚板を打ちて待つ迎へ　啓子
へぎ盛りのみどり匂へる走り蕎麦　由美子
かなかなや碓氷峠の七曲り　満智子
出迎へは和紙行灯とかなかなと　和
かなかなや遺品の中に山日記　和子

若楠句会（浦和）

朝顔や良きことだけを告ぐる吾子　葉子
朝顔や着付けし孫の細き腰　操
高齢の夫婦の転居新涼た　京子
秋来たる盛りの多少で喧嘩する　宏治
新涼や過去まだひとつ捨て切れず　慶子
多彩なるカンナの花の色褪せて　久美子
行きたまへけふも朝顔咲きほこり　楽
新涼や寝違へし首ぽきと鳴る　美津子
新涼やせせらぎ匂ふ御留山　風舎
新涼の高原の風君の風　鶴城
漬物の歯ごたへシャキリ新涼た　真由美
秋涼し猫の通じの良き日なり　直子

若狭水明俳句会（若狭）

風薫る大河人気の小谷山　風花
風薫るおしやれして行くマーケット　鼓
樟や京の古刹に風薫る　自然
グランドの生まる快音風薫る　祥子

薫風や野菜サラダのてんこ盛り　風湖
さくらんぼ産地が光る道の駅　保人
さくらんぼ一人で食べてはなりませぬ　ことは
助走してホップステップ風薫る　和風
手と足のバラバラ体操風薫る　初花
デパートのお子様ランチさくらんぼ　笑風
何処行くも二人は一緒さくらんぼ　郁子
みちのくの明るき乙女さくらんぼ　夕月
連綿と受け継ぐ句座や風薫る　友夏
秋づく夜句碑ある寺に星の降る　寛久

新　樹　の　会（浦和）

鴨川を渡る夜風や大文字　道を
大文字五条河原の深き黙　徹雄
万人の魂を送るや大文字　修
大文字消えて一献嵯峨の宿　風子
止まり木にひとり酒場の大文字　清吉
新涼や居ずまひ眩し訪問着　鶴城

たかんな俳句会（川口）

川なりに曲る小径や白粉花　義子
送り火や母の背さらに丸くなり　たみい
おしろいの花壇を囲み老女の輪　小麦
送り火に家苞なりと待たせたし　みち
迎へ火や二時間半の花蝋燭　のり子
魂送り賑はひ果てし静寂かな　鶴城

め　だ　か　句　会（浦和）

年経れど若輩者よ青嵐　美津子
老若がねぷたを跳ねて月は無く　尚己
運動会アンカーの子ら般若顔　恵美子
蜩やわたり廊下の雨宿り　六弦
願ひ札ゆらり運びし天の川　和子
親恋し渡つてみたき天の川　妙子
風通ふ庭木に蜩群れて鳴く　荘志
天の川有明球児照らしけり　道代
永遠の天の川澄む地球なら　楽
もの思へど鳴かぬひぐらし風の音　眞美子
若鳥のすこしかすれた鵙の声　真理子
天の川比翼見詰むる星と星　月を
漫ろゆく若宮大路涼新た　はるみ
銀漢や星のさざめき打ち寄する　知子

越　後　の　会（浦和）

静けさや古墳群より秋の声　知子
東と西の決勝球児空高し　宣子
東の空はほの赤うして遠花火　輝翠
錆鮎や苦しきことも多かりき　翔太
佇めば木もれ日の中秋の声　真理

青　葉　の　会（浦和）

虫の声聞こえくるかに秋めく夜　美紗子
街歩く背に吹く風の秋めくや　久美子
秋めきて遊ぶ子の声空が呑む　桂子
無花果の甘煮を今日のやさしさに　真理
秋豪雨道路が川の今宵かな　美智枝
今治やしまなみ海道秋夕焼　美子
秋めくや待ちに待ちたる雲到来　公子
今昔の話の尽きぬ敬老日　和子
今し方ずぶ濡れになり盂蘭盆会　洋子
蜩や只今僧の説法中　啓子
今朝の窓開け放しつつ秋麗ら　輝翠

小　梅　の　会（浦和）

ら・かんぱねら鳴りゆく海に秋の風　恵子
新涼や重き扉を押し開くる　隆文
秋霖は遠くなりけり母の声　隆然
秋立つや復帰の友の音楽会　進
朝顔の鉢そこここに小学生　啓子
鈴虫の里里林と鳴く夜更けかな　道を

若鮎句会（浦和）

星合や喜色の裏に隠し事　貴
子等すべて胸に星持つ星祭　秀子
七夕さま地球の男女まだ元気　山菜
風の盆胡弓におされ告白す　輝翠
被災者の願ひをのせて星祭　真
仏壇の残暑の扉開けぱなし　稀香
至福とは釈迦と語らふ花畠　芳春
告別に並ぶ新刊秋に入る　拓真
短冊にドロップシールの星ひとつ　喜夫

円卓の会（浦和）

やはらかき会話途絶えて鈴虫の夜　京子
鈴虫や赤子の寝顔満ち足りて　修
一年は待てぬ逢瀬や星今宵
バス停にチオビタ二本秋初め　道を
地獄絵図抜けて改札星の秋　拓真
轍に沿うてゆく自転車や草の花　鶴城
七夕や投網くず籠吹き流し　翔太
鈴虫や苦界へ結ぶ衣紋坂　月を
　　卓郎

なごみ句会（浦和）

秋深し万感込めて深呼吸　茂子
ぶうらりと小学校の糸瓜棚　かつ子
夜半の雨潤む街灯秋深む　喜恵
うかうかと生き延びてをり秋深む　節代

和歌山水明俳句会（和歌山）

暮れのこる白さるすべり堂庇　和子
喪の家に明るさ戻る螢の夜　千枝子
一斉にそよぐ白蓮あしべ庵　千世子
連日の酷暑と戦ふ球児達　満耶子
蝙蝠や我が家の雨戸宿にする　きわゑ
鰺釣りを競ふ親子の影ながし　洋子
蝉も吾も碧き影得て水飲まむ　廸代

水明澪つくし句会（大阪）

夏の河水平線は海の碧　智恵子
　☆
枝豆や作業つなぎの土まみれ　人美
頂きし野菜ととのへ盆支度　ノルン
送り火に照らされ帰る御霊かな　洋子

神戸大池句会（神戸）

病窓の向かうの山に月の影　千津子
振り向けばテレビより漏るつくつくし　早苗

水明熊谷句会（熊谷）

糸瓜の揺れぬ一日の無かりけり　茂子
曲屋に点る一燈秋の声　風子
尼僧行く行人塚や秋の声　徹平
悪口は言はぬ無骨な糸瓜かな　秀子
親指をぐつと突き出し九月場所　忠男
甲冑の暗き口より秋の声　君夫
半眼の大仏の聴く秋の声　栄子
俳聖の辿りし道や秋の声　道を
菜ひとつ添ふる朝餉の青へちま　卓郎
　☆

風　声

○**現代俳句**一〇・一一月号「第三回現代俳句『風を詠む』」欄

珈琲の濾過紙の折り目秋の風　菊池ひろこ
地球めらめら新涼とは名ばかり　青木鶴城
蟷螂も少年もすぐ身構へる　内田恵子
シャッターを彩るアート後の月　岡田宣子
擂粉木に母のリズムやとろろ汁　越田栄子
浅間小浅間影の正しき今朝の秋　五明　昇
生きては般若死して観音白芙蓉　染谷風子
燕帰る空の何処に道しるべ　永野史代
残照に夾竹桃の白々し　茂木和子
無法なる無縫な海へ放生会　本橋稀香
明日来ると出でし病棟秋深む　檜鼻ことは

○**現代俳句**一〇・一一月号「『風を詠む』特選句」欄

松田ひろむ氏の秀句五句鑑賞で

蟷螂も少年もすぐ身構へる　内田恵子

確かに身構える少年も思春期の悩みの姿。

○**くぢら**（中尾公彦主宰）九月号「受贈俳誌美術館」欄

夕凪の椽ふつふつと小津映画　**鬼之介**

○**こんちえると**（関根道豊版元）八月号「受贈誌紙お礼」欄

残されし紫蘇の孤独よ刺身皿　**鬼之介**
喘ぐ子に我が命をと母寒夜　近藤徹平
穀倉に積まるる武器や麦の秋　青木鶴城
女工越えし峠に謂れ桐の花　菅原卓郎
初かつお器用にさばく左利き　清水桂子
相手国との条約無視や狂ふ夏　宮﨑チアキ
アリウムや恥づかしく口回すしか　吉川拓真

○**こんちえると**（関根道豊版元）九月号「受贈誌紙お礼」欄

睡蓮にかな女を真似て屈みけり　**鬼之介**
夏期講座脳医学者の「バカの壁」　近藤徹平
毒の世に蜻蛉生るる平和かな　青木鶴城
戦火まだ眼裏に黄の向日葵野　下川光子
空元気出して乗り切る極暑かな　清水桂子
紫陽花や父へ怒りはありません　吉川拓真

○**玉梓**（名村早智子主宰）九・一〇月号「他誌拝見」欄

凱旋の将の気分ぞ薔薇の門　**鬼之介**

○**暖響**（江中真弓選者）九月号「俳誌散策」欄

「水明」二〇二六年六月号を鈴木千賀子氏が鑑賞

主宰**山本鬼之介**詠「勘亭流」より三句

記念日の無疵の空よ揚雲雀
演目の江戸文字きまり風光る
嘗て悪餓鬼かき混ぜてゐる蝌蚪の池

一句目、何の記念日かは示されていないが大切な日。無疵な空とは明け方の静謐な空か、揚雲雀が祝っているようだ。

二句目、歌舞伎座だろうか江戸文字の勘亭流の書体がいかにも粋だ。三句目、流れのない澱んだ蝌蚪の池、悪餓鬼ならば本能的にかきまぜるに違いない。かつて悪餓鬼だった作者。

「白頭の川鵜」町野広子より二句

歯科眼科内科整形二月尽

重ね置くブリキのバケツ万愚節

「春尽く」松井由紀子より二句

初花や幸せさうな散歩道

春コート銀座の人になりに行く

○**卻**（山本一歩主宰）九月号「受贈誌の一句」欄

狛犬の阿吽に応へ亀鳴けり　丸屋詠子

（日高道を抄出）

水明発展基金御礼（敬称略）

―令和八年九月三十日現在―

山下ユリ子	1	口
りんどう忌より		
石井喜恵	1	口
河野はるみ	2	口
日高道を	3	口
石関六弦	1	口
反町　修	10	口
大塚茂子	2	口
梅澤佐江	1	口
皆川更穂	1	口
越田栄子	2	口
山岸久美子	1	口
清水桂子	1	口
染谷風子	1	口
大場順子	2	口
綿貫ひさの	1	口
曲淵徹雄	2	口
森　和子	1	口
石山かつ子	5	口
西幅公子	1	口
平野　楽	1	口
内田章子	2	口
秋谷風舎	1	口
梅澤輝翠	2	口

―合計　45口―

「現代俳句カレンダー 2027」販売のご案内

「現代俳句カレンダー 2027」ご注文の受付を開始します。
今年も引き続き多くの会員からのご注文をお待ちしております。

◆**体　裁**：A 4判の上下二連

◆**価　格**：1,760 円（税込）/ 1 冊（定価 2200 円の 2 割引）
諸物価高騰の理由で値段が大幅に上がりました。

◆**注　文**：葉書に以下の項目をご記入ください
①注文者の住所・氏名・連絡先電話番号
②注文冊数
③受取方法[発行所で引取･自宅へ郵送等]
葉書の宛先は
〒330-0064　さいたま市浦和区岸町 4-10-21
水明俳句会　カレンダー係

◆**注文締切**　11 月 16 日(月)　お早めにお願いします！

◆**お支払い**　商品と引き換えでお支払いください

水明俳句会より下記 11 名の俳句が掲載されます。
主宰（短冊揮毫）、網野月を（短冊揮毫）
大村節代、石山かつ子、大橋廸代
星野和葉、石井喜恵、境　延昭
五明　昇、青木鶴城、日髙道を

問い合わせ先　　総務部　日髙道を　TEL 090-2122-1223

主　　宰　　山本鬼之介
総務部長　　日 髙 道 を

水明誌代・同人費・季音同人費の納付のお願い

水明俳句会会員の皆さまには平素から格別のご高配を賜り厚く御礼申し上げます。

またこの度の誌代値上げにつきましてもご理解を賜り誠に有難うございます。

さて、今年も残り少なくなってまいりました。

今月号には「水明誌代並びに・同人費・季音同人費」のお支払いのための郵便振替依頼書の用紙を同封させていただきました。

ちょうど誌代等の更新時期をお迎えになられる皆様にはこの振替依頼書をご利用いただければと存じます。水明俳句会の運営は皆様の誌代等のお支払いにより成り立っておりますがそのお支払いは６か月または１年の前払いをお願いしております。

皆様のご協力をお願い申し上げます。

時節柄、会員の皆さまには益々のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

水明俳句会　主　　宰　山本鬼之介
総務部長　日髙　道を

後記

十一月号をお届け致します。執筆者の皆様のご協力を得てかたちにすることが出来ました。誠にありがとうございます。

今月号の近詠欄は「音」のテーマです。今月で五回目のテーマ詠となりました。執筆者のお二人で共通のテーマを話し合い、共詠していただいております。今後も共詠の企画を進めて、特色のある企画に育ってくれることを祈っております。

本号には九月に開催されましたりんどう忌の記事が掲載されています。先師を温（たずね）て水明の創刊の志に思いを馳せ心を新たにする、水明にとりましては大切な行事です。残念ながら御参加の叶わなかった皆様にも来年は是非とも予定されてください。

りんどう忌に先立ちまして、九月一四日に常任運営幹事会では恒例となりましたかな女句碑の展碑を行ってまいりました。水明の会員の皆様も是非、調神社および別所沼公園の句碑をお参りされてください。

今月号には「新同人の紹介」の欄を設けております。新同人八名の皆様に登場して頂きました。同欄にはまた自選句を掲載しています。秀句揃いです。質感のある句ばかりです。ご鑑賞ください。屹度、感動されることと存じます。

さて今年の主な水明の行事は十月三十一日の水明塾が仕舞となります。水明では年間に七つほどの大きな行事があります。それに加えて今月号にも案内がある「新珠賞」の作品募集が来年当初に予定されています。奮って応募されますようにお願い申し上げます。

閑話休題。近ごろ岩波文庫の曲亭馬琴著『増補・俳諧歳時記栞草（上下）』を見る機会が増えました。季語の起源というか、由縁に興味を覚えるからです。現代の歳時記より余程読み易くて重宝しているのです。ただ一点困るのは、いろは順に掲載されていることです。これには些か閉口しています。

（月を）

今月のはてな？

販（ひさ）ぐ

鑽火（きりび）
呪詞（じゅし）
海霧（じり）
冬青（そよご）
火輪（かりん）
米栂（こめつが）
青槇（あおなつめ）

頁 19 24 29 33 35 46 71 74

水明発行所受付時間

（048−822−4741）

曜日：**（月・火・水・木・金）**

時間：12時半〜午後4時半

（土・日・祭日は休み）

水明の行事と重なった時は休み

（上記の時間には係がおりますので、ご用の方は 時間内にお願いします。）

水明

令和八年十一月号
通巻一一五四号
令和八年十一月一日発行

発行所 水明俳句会
〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四−一〇−二三
電話 048−822−四七四一

ホームページ
「水明俳句会」で検索

誌代 半年分 七、五〇〇円
一年分 一五、〇〇〇円
同人費（誌代を含む）
一年分 二七、〇〇〇円
季音同人費（誌代を含む）
一年分 三三、〇〇〇円
振替〇〇一七〇−〇−一九一三九三

発行人 山本鬼之介
印刷所 中央美版

き り と り せ ん

季音 雪・月・花

二月号 十一月十五日締切

※雪・月・花の該当欄を赤丸で囲む事

氏名（俳号）

題

最上部の桝から間を開けずに楷書で丁寧にお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先（電話番号）

氏名（本名）

年齢　歳

きりとりせん

最上部の桝から間を開けずに楷書で丁寧にお書きください。

水明集

二月号　十一月十五日締切

都・市・町名	氏　名（俳　号）
都市町	

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先（電話番号）

氏名（本名）　　年齢　　歳

きりとりせん

山紫集

二月号　十一月十五日締切

二月の兼題　「立　冬」（傍題可）

投句対象者　同人及び季音同人「花欄」「月欄」

氏名（俳号）	

※最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先（電話番号）

氏名（本名）

年齢　　歳

きりとりせん

鼓笛集　二月号　十一月十五日締切

※当月は日高道を選です。

※当季雑詠で一句を投句ください。

※投句対象者　水明集の同人に限ります。

氏名（俳号）

※最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。（鉛筆書きは不可）

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先（電話番号）

氏名（本名）

年齢　　歳

季音抄

山本鬼之介

燈台の高く見ゆる日鵙猛る　大村節代
打水す生家の土の香をもとめ　菊池ひろこ
秋風にわが身を透かす竜飛崎　五明　昇
尼僧行く行人塚や秋の声　近藤徹平
降臨の逆鉾祀る秋の峰　境　延昭
電線を撓めて止まる稲雀　島津初花
甲冑の暗き口より秋の声　横山君夫
ひと夏の疲れも共に秋扇　日髙道を
鮎さびて蒔絵の中に潜る刻　正木萬蝶
魂送り書棚に義父の広辞苑　青木鶴城
大文字五条河原の深き黙　曲淵徹雄
半跏趺坐そばだてて聴く秋の音　原田秀子
夕花野風に消さるるハーモニカ　渋谷きいち
大仏の螺髪なでたき秋はじめ　越田栄子
潮騒の海の暮色よ稲光　染谷風子
頬き降るや五山の燈に月の雨　菅原卓郎
宵の道ふり向かしむる秋の声　梅澤輝翠
片恋や風に溢るる萩の花　新　暦文

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内（句に雑誌名、句集名、刊行月を付す）

▼散歩道〈身辺トピック〉

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内（題をつけて）

▼山紫水明〈随筆〉

テーマ…自由

枚　数…二百字詰原稿用紙五枚半以内

水明抄

山本鬼之介

ベランダにシーツ舞ふ黙日の盛　寺町知子
鉛筆を削る音止み秋隣　阿部幸代
着流しの涼しく立てり京都駅　石井直子
竹林のそよ風を呼ぶ夏座敷　反町　修
窓を打つ蛾の親しさよ夫ならむ　本橋稀香
神奈備にあまねく満つる秋の声　丸屋詠子
終バスを降り古里の夏の星　皆川更穂
佐渡の海足湯にひとり大夕焼　田中弘子
軍神に負けるものかと旱星　飯田忠男
打水や一番星が姿見せ　倉田星歩
「海坂」の城下もかくや蟬時雨　三浦真由美
グールドの呟くピアノ夜の秋　森下山菜
日の暮れを待てず花火を選る子かな　内田章子
折鶴に突風絡む終戦日　遠藤人美
初鮎の川面ひらりと艶姿　綿引まりこ
打水や隣家先へも御裾分け　杉浦千祐
気が付けば被災地に舞ふ蜻蛉かな　元田亮一
立ちすくむ犬の三歩や日の盛　平野　楽

水明例会案内

句会名	日時	会場	指導者	幹事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ㈦(パルコ・10F)	山本鬼之介	菅原卓郎 小林京子
第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 青木鶴城
第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明　昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ㈦(パルコ・10F)	山本鬼之介	石井喜恵 反町　修
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	河野はるみ 岡田宣子
若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化㈦	大橋廸代	森本早苗